

あきたの文芸

第五十八集

あきたの文芸 第58集 目次

●小説・評論

奨励賞

海辺の補助輪

跡部 佐知

5

●詩

最優秀賞

空如―声なきものに筆を向けて

高橋 岑夫

奨励賞

月見草の花言葉は

鈴木 仁

奨励賞

Parallèle (パラレル)

眞壁 悠花

入選

鈴木 敏男 小野 佑真

グリーン賞

堀井 航太郎 佐藤 遼典

17

●短歌

最優秀賞

終戦八十年

鈴木 修一

奨励賞

母への手紙

佐藤 美知子

奨励賞

ルソンの父は

遠藤 恵美子

奨励賞

合掌

金 万和

入選

高田 勝彦 北嶋 香奈子

佐藤 精子

グリーン賞

鈴木 敏男 ヲワリ

グリーン賞

柳原 知可子

●俳句

最優秀賞

豊饒

岸部 吟遊

29

25

最優秀賞	佐々木 豊
奨励賞	三浦 静佳
奨励賞	藤井 ただし
入選	松井 憲一
グリーン賞	塚本 佐市
	佐々木 成
	佐々木 亮子
	阿部 祐子
	米沢 由紀子
	高橋 雄子
	成田 伊吹
	富野 三千雄
	掛唄
	村の未来図
	仁王尊

●川柳

最優秀賞	和田 仁
奨励賞	菅原 浩洋
奨励賞	荒木 小菊
奨励賞	三浦 千両
入選	岩谷 隆史
	迷界吉祥
	春を知る
	晩夏
	続編をつづる
	小松 隆義
	鷲谷 凡葉

●エッセイ

最優秀賞	渡辺 礼司
奨励賞	杉山 靖広
奨励賞	高橋 文子
入選	鈴木 修一
グリーン賞	跡部 佐知
	糸
	バスを買う
	お見送り、そしてお出迎え

●最優秀賞受賞のことば

●選評

小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ
-------	---	----	----	----	------

石倉葵	保坂英世	古澤りつ子	佐藤茂樹	山崎如酔	渡辺修
-----	------	-------	------	------	-----

尾崎加奈	前田勉	加藤トシ子	泉屋おさむ	伊藤光愁	菅原敏紀
------	-----	-------	-------	------	------

岡英里奈	堀江沙オリ	熊谷すが子	加藤昭子	近藤たつお	畠山研
------	-------	-------	------	-------	-----

●あきた県民文化芸術祭2025「あきたの文芸」応募状況

.....

73

●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

.....

74

小說・評論

小説・評論

奨励賞 海辺の補助輪

秋田市 跡部 佐知

季節の変わり目に吹く涼風は、人を寂くさせる。

おばあちゃんが亡くなったときも、涼しくて、人肌恋しい風のおいがした。薄暗いワッフルームで一人、耳に押し当てたスマートフォン越しに、おばあちゃんの一生懸命出している声が空気を震わす感触はもう思い出せない。ずっと心のどこかに穴が開いたような感覚が拭えないまま、気づけば一年が経っていた。

わたしは福島にある海見える町で育った。開発された丘に建つ一軒家からは、広大な太平洋が一望できる。天気がいいときには、大きな石油タンカーやフェリーが見えた。小学生くらいまでは、海に連れて行ってもらって泳ぐのが大好きだった。潮でべたつく手触りも、水着で肌が露わになるのも気に入

しなかった。海に入らなくなったのはいつからだろう。泳ぐのは楽しいはずなのに、砂浜を踏み、海辺をぶらつくだけで満足するようになってしまった。

大人になるとはそういうことなのかもしれない。昼休みにドッジボールや鬼ごっこはない。海だつて見るだけで満足できる。自分の体を少しずつ省エネに切り替えて、次の世代へと命を繋ぐ準備をする。無意識に、でも確実に、十九歳のわたしは大人に近づいていた。

小学生のころは友だちがたくさんいて、明るい女の子だった。図書室なんて行かずに、そこそ鬼ごっこやケイドロをして走り回るのが好きで快活な子どもだったはず。中学生になって、名字が立村に変わったところから、友だちがいなくなった。

内面は何も変わらないのに、名字が変わっただけで急に周りがよそよしくなったのだ。中学校も、小学生のころと同じ距離感で過ごしたかったのに、周りがそれを許さなかった。大して仲良くもないのに、下の名前でしか呼んでくれなくなった同級生もいた。優しさ故の変化なのだろうけれど、その優しさ

がひりひり痛む。次第に、自己紹介のときには名字だけを名乗るようになっていった。新しい名字を好きになるため。周囲から見られる自分を演じていくために。親がくれた、葉から始まる下の名前に対しては、名字を名乗る度に違和感が膨らんでいった。

人はわたしから離れていった。正確に言えば離れていったというよりも、小学生からの友だちは、名字が変わったわたしへの接し方がわからなかったのだと思う。

中学、高校と孤立していったけれど寂しくはなかった。図書室に行けば、学校よりも広いお話の世界があつて、あの空間の本でさえ、きつと一生かけても読み尽くせない。学校では、楽しんでいる人も、そうでない人も、みな平等に時間が流れる。同じ授業を受けて、給食を食べて放課後を迎えるだけ。能動的に勉強しても、受動的に学んでもいい。何か極端な成果を求められているわけではないのだから。椅子に座り、じつとして授業を受け、昼休みには図書室に行った。

休日は友だちと遊ぶ代わりに、おばあちゃんとよく遊んだ。図書館に連れて行ってもらったり、ターミナル駅にある書店で本を買っ

でもらったりした。お昼には、お寿司を食べさせてもらうことが多かった。おばあちゃんは、わたしの住んでいた町よりもずっと山間の方に住んでいたのに、列車を乗り継ぎ、最寄り駅までいつも迎えに来てくれていた。

おばあちゃんと会わない日でも、一人で図書館へ行った。仕事休みのお母さんに、延々とお父さんの悪口を聞かされるのが嫌だったから。二人が離婚した理由は性格の不一致らしいけれど、離婚すると言い出された小学六年生のころの記憶がすっぱり抜け落ちていて、それらしいことはほとんど覚えていない。あるとき、雷が目の前で何本も落ちたような、家が壊れてしまうと思うくらいの大喧嘩があったことだけはうつすら覚えている。

以来、お父さんは帰ってこなくなつた。

おばあちゃんは、わたしの話をちゃんと聴いてくれる人だった。

悩んでいると告げれば、どうしたの？ と必ず耳を傾けてくれて、相談すると話の助言をするのではなく、対等な目線でいっしょに物事を考えてくれる人だった。だからわたしも、おばあちゃんの話をよく聴いた。

高校二年生のころ、おばあちゃんから郡山

の文化センターに行こうと誘われたことがあった。おばあちゃんからどこかへ行きたいと言いつづけるのは珍しかったから、二つ返事で了承した。

最寄り駅を見上げると、駅舎の窓ガラスの向こうから、ハットを被つたおばあちゃんが手を振っている。わたしも手を振り返して階段を駆け上がった。

「おばあちゃん。今日はなんでわざわざ郡山まで行くの？」

「まあ。ちよつとね」

「うん？」

幾ばくか不安を感じていたものの、これ以上聞い詰めてもばつが悪かったから、なるだけ気にしないようにする。

電車で揺られることおよそ二時間。ようやく着いた郡山には、大きなビルとアーケードが目立つ。二人で文化センターまで歩いた。

文化センターでは、生け花の展示がやつていゝるらしい。二人分のチケットを買ってもらい、案内された順路を通る。

「生け花つて初めて見る」

動かない花を見つめながら、隣にいるおばあちゃんに声をかけた。

「そうでしょう。ばあちゃんは生け花習つてるの」

「そうなの？ 初耳なんだけど」

「これを見てごらん」

赤い茎みtainな長い草と、紅色の花に、黄緑色の葉っぱが生けてある。その壺の下には、わたしと同じ姓の名前が書かれている。

「そういうことだったんだ」

「うん。奨励賞だけだね」

「でもすごいよ。おめでとう」

おばあちゃんは、目を細めて笑つた。

二人でいる時間は長いのに、笑顔を見たのが初めてのことに思えたのは、いつも人生相談ばかりしていたからかもしれない。

おばあちゃんは、自分が生けた花の展示をわたしに見せたかったのだ。生け花で賞をとつたからいっしょに郡山まで見に来てほしいと頼めば、断られると思つたのだろう。

本を買ってもらえなくても、お寿司を食べさせてもらえなくても、おばあちゃんといっしょにいたいのに。好きだからいっしょにいいのにな、と思つた。

「てか、生け花だつて最初から言つてよ。少し不安だったんだから」

「そうだねえ」

おばあちゃんは口数が少ない。友だちと見に行かないのだろうかと一瞬思ったが、まずわたしが人のことを言えないのに気づく。わたしが高二になつてから、おばあちゃんは終活という言葉の口にするようになって、大切なものを引き継いだり、今日のように生きた証を見せたりするようなことが増えた。

生け花を見たあと、郡山でもお寿司を食べた。山間部なのにお寿司がおいしいのはどうしてだろう。

おばあちゃんと長い時間いっしょの電車に揺られることは少なかったから、あの日、車内で話したことはやけに色濃く残っている。山間を抜ける電車を乗降する人はまばらで、木々の隙間に茜色の空が見えた。

「今日も楽しかったよ」

「うん」

こういう風に言葉を紡げば気持ちが伝わりやすいのか、しばらく考え込んでいた。その沈黙は妙に長く感じられて、そろそろと心が落ち着かなかった。

「あのさ。いつもいっしょに付き合ってくれてありがとう」

おばあちゃんは何も答えなかった。

パチパチ、と小枝が車両に当たる音と、レールをガタガタ揺らす音が耳たぶを優しく揺らす。

「おばあちゃんは、最寄りで降りなよ」

「一人で帰れるの？」

「もう高二だよ。子どもじゃないから電車なんて楽勝だよ」

おばあちゃんは山間の駅で降車した。わたしの最寄り駅まで送ると言っていたが、それだと帰りは日が落ちきつてしまつて危ない。

生け花に連れて行つてくれた日を皮切りに、おばあちゃんへの感謝を言葉に起こして伝えるようになった。態度から生じる愛情と照れ隠しを、わたしはしっかりと感じ取つていたのだ。代わりに、わたしは言葉を返した。会つたときには必ず、今日はありがとうと伝えた。

高校三年生の冬。大学に合格して秋田に住むことになったのをおばあちゃんへ告げると、まず学費と生活費の心配をしていた。お父さんが払ってくれると伝えたと、安堵したように表情筋が緩んでいた。

両親が離婚しても、わたしはお父さんと連

絡を取つていた。お父さんは私のことを考慮して、国公立なら学費と生活費を出してくれるそうだ。お父さんが金銭面を支えてくれるというのは、お母さんも知っていることなのに、それでもお父さんに対する悪口は止まらなかった。ここを出れば、いまよりも心落ち着いて暮らせる、そう思っていたから、引越しの日が待ち遠しかった。

月に一回、おばあちゃんに向けてお手紙を書いた。引越したときに、お野菜や缶詰、日用品のぎつしり入った小包を送つてくれ、そこにはメモ書きが入つていた。

「貰いものもあり悪しからず。タオルは洗濯してあります。一万円入れておきます。いつか秋田に伺いますよ。四月二十五日　ばあちゃんより」

筆脈が揺らいでいる。おそらく手先が言うことを聞かず、満足に字も書けないのだろう。わたしがお手紙を書いても、返事はいつも電話で届いた。字を書くのが大変だという話は何度も聞かされた。

おばあちゃんは、頑張つてとは言わないけれど、密かにわたしを応援してくれていた。電話では、いつか秋田に行つてみたいとよく

口にしていた。思えば、それは会いたいということを暗に意味していたのかもしれない。

でも、当時のわたしには案内できる場所も大学の学食くらいしかなかっただろうし、紹介できる友だちもないしで、来ても逆に不安にさせてしまうだけだったとも思う。そして、むしろわたしから万障繰り合わせてでも会いに行くべきだった。一度でいいから、大学生になったわたしの顔を見せるべきだったのだ。

おばあちゃんが望んだいつかは、一生訪れることのない時間になった。

昨年のお葬式のときにぎやあぎやあ泣いていた家族は、それぞれで楽しそうに暮らしているらしい。親戚もみんな泣いていたのに、わたし一人だけは泣けなかった。

おばあちゃんが死ぬ前に、一番長く時間を過ごしたのはわたしだ。一方で、長く時間を過ごしてきたからこそ、新鮮な会話をしてきた。愛されていることを理解し、わたしの気持ち言葉をにしていた。秋田に来させてあげられなかったことや、大学生になったわたしを見せられなかったことは後悔している。それに、もしわたしが福島に住み続けていた

ら、もつと早く孤独死にも気づけただろう。いや、継続的に会い続けていたら、死ぬこともなかったのかもしれない。

あれから一年経つというのに、まだうまく笑えない。

周りの学生のように道をうまく歩けない。好きなものは、好きだったものと成り果て、かわいいもの、おいしいものにとぎめくことがなくなった。

しかし、無気力なくせして心臓の鼓動は鳴りやまず、日々を刻んでいる。大学には、義務感と責任感だけで通っていた。通学できなくなってしまうたら、合格を喜んでくれて、悩んでいた中学時代、高校時代のわたしに寄り添ってくれていたおばあちゃんに申し訳なかった。

中高で同年代の友だちを作ってこなかった反動で、おばあちゃん以外との接し方がよくわからない。新入生オリエンテーションの日も、講義でグループワークをしたときも誰とも仲良くできなかった。大学二年生になって、少しは既存のグループが変化するかと思えばそんなこともなく、既に仕上がった友だちの輪のままで。

それに、ご飯を作ったり、掃除をしたり、洗濯をしたりするのも、生きる限り一生続けなければならない。そう考えると憂鬱になった。脱衣所に洗濯物の山ができている。シンクには昨日の洗い物が溜まっている。それでも大学に行かなくてはならない。おばあちゃんが死んだときも泣いていなかった奴が、いまになって「やっぱり悲しかったんです」だなんて言えるわけもない。強がりなハートといじらしさが、変なところで目立っていた。

夏休みも終盤の九月。課題も終わってやる事がなくなったあるとき、海に行くことにした。小さいときからずっと近くにあったから、海が好きだった。お昼時だったため、冷蔵庫の中を開けてみたが何もない。学校は休みで気を紛らわすものもなく、思考する時間だけが増え、張りつめた心身はもう限界だった。眠りたいのに寝つけず、白んできた空と共に、質の悪い睡眠に落ちる罪悪は寝ても覚めても拭えなかった。

海に救いを求めている。

秋田駅で羽越本線の岩城みなと駅までの切符を買った。四百二十円だった。九月の暮れ

の北東北は、ほんのりと涼しい。半袖のポロシャツの上に、薄手の上着がほしくなるくらいに。

高校生のころは毎日のように電車に乗っていたのに、秋田で電車に乗ったのは初めてでどこか懐かしくなる。海のある方角から日の光がひゅんと差し込んできた。日本海は本当に日が沈むらしい。ワンマンカーでの降車に手間取り、運転士さんのいる前方の車両まで駆けたのが恥ずかしかった。

電車を降りた途端、潮鳴りに襲われた。ごうごうと、自分の背のほうで波しぶきが鳴っている。振り向くと、海面がきらきらと揺れていた。

ピンク色の駅舎を出て、右側にある階段を下ると和風な通路があった。若干地下通路の様式をしているそこに足を踏み入れた途端、靴底にじやりじやりとした砂の感触。同時に、じとじとした海のおいがした。通路を出て左に進み、高架の下をくぐると道の駅が見えた。道の駅に着いても、温泉やレストランには目もくれず、ひたすら海の方へと足を動かした。

建物の後ろ側、コンクリートの階段が砂を

被っている。階段を下ると、小汚い砂浜が広がっていた。異国の言葉の書かれたペットボトルや、プラスチック製のがれきが多く転がっている。白い流木にハンドバッグを置き、海へ向かってゆつたりと歩いて行つた。海にほど近い色の濃くなっている砂浜で、ボトルメールや綺麗な貝殻を探したが見つからなかった。輝く海を見て、うるさいくらいに鳴っている潮騒に包まれていると、徐々に五感は遮断されていく。波を見て、潮鳴りを聴き、風のおいを記憶するだけ。

空はオレンジが濃くなり、潮は少しずつ満ちてきた。バッグを置きっぱなしにしていた流木は、数百メートルは遠いところにあった。波打ち際を歩いているだけで、あつという間に時間は過ぎていたらしい。ハンドバッグの隣に、黒いトップスを着た人影がある。その人は、海の方を見ていた。波風に揺れる胸下まで伸びた金髪は、夕陽を反射して水面のように輝いている。どきまぎしながらも、白い流木に向かって歩き出した。

近づいて目にした彼女は、わたしよりも四、五歳は大人に見えた。ふつくらとした桜色の唇に、雪原のように白い肌。黒い半そで

のニットも似合っている。

自分のバッグを手取る前に、彼女へ一声かけた。

「すみません。これわたしのバッグで」

海を見ていた彼女は、急にわたしに話しかけられて驚いている様子だった。

「あ。こちらこそごめんなさい」

「バッグ、見てくれてたんですか？」

「うん。海見るついでに」

見かけは派手だけれど、優しい人なのだと思つた。

「ありがとうございます。では、わたしはこれで」

「待つて。もうすぐ夕陽が落ちるところだから、座りなよ」

とんとん、と流木の上を撫でた。無言で、彼女の隣に腰掛ける。潮風に混じつて、花のような甘くて優しい香りがした。

「ここにはよく来るの？」

「いえ、初めて来ました」

「そっか。私は近くに住んでるからさ、ときどき来るんだ」

「海には、何をしに来るんですか？」

「バランスを取りに来る。人の作つたものは

かり目にしているとね、自然なものを見たく
なるときがあるから」

「バランスですか？」

「うん。バランス。会社でパソコンの画面見
てるからね。休みの日くらい自然な青を見た
くなるんだ」

働いていることと、一人の時間を嗜んでい
ることに小さな憧れを抱く。

「君は？」

「わたしは、その」

自分のいまの心情を言語化できないでい
た。言葉に起こせば、気持ち言葉に書き
されて、ふわふわとおぼつかない足を掬わ
れそうだった。

「ちよつと。海、見たくなつて」

「ふーん」

海に夕陽が落ちていく。遠くを見つめる彼
女の横顔。長いまつ毛が輝いている。見知ら
ぬ人を前にして、急に心の穴が大きくなつ
て、気づけば大粒の涙を流していた。大丈夫
夫？ と声をかけて、背中をさすってくれた
彼女のしなやかな金髪と、わたしの涙がきら
きらと光っていた。

気づけば、声を詰まらせながらも、名も知

らぬ彼女にいきさつを話していた。名字が変
わったこと、おばあちゃんと仲が良かったこ
と、そのおばあちゃんが亡くなって、一人で
ここに暮らしていること。いつもどこかに帰
りたいのに、どこに帰りたいのかわからなく
て、帰る場所も、わたしを待つ人も、もうど
こにもいないこと。

優しく相槌を打ちながら、大変だったねと
共感し、目線を合わせ、想像を膨らませてい
つしよになつて考えてくれた。ゆつたりと話
を聴いてくれる態度に、おばあちゃんのこと
を思い出す。夕陽が沈み、あたりが暗くなつ
たころには、泣き止んで冷静になつていた。
「あの階段上ると、お店とか温泉あるから少
し休もつか」

無言で頷き、彼女が指さす方について行つ
た。彼女は、時折わたしのほうを振り返り、
心配そうな目で見つめた。時刻は既に十八
時。わたしたちは道の駅の休憩所に入った。

「何か飲む？」

「え、悪いです」

「いいの。遠慮しないで」

「すみません。じゃあ、お茶でお願いしま
す」

「私は缶コーヒーにしよつと」

ピツと音が鳴つてすぐ、ガタガタと飲み物
の落ちてくる音がした。泣いたあとの酷く乾
いた喉に、冷たいお茶がよく染み渡る。

「秋田市から来たんだよね」

「はい。電車で来ました」

「じゃあ、十九時くらいの電車あるからそれ
に乗つて帰つたらいいよ。電車の時間までは
いつしよにいるね」

「ありがとうございます」

ブラックの缶コーヒーを一口飲んで、彼女
が言つた。

「私も母子家庭だからわかるところもある
よ」

自分の話ばかりしていたせいか、彼女の話を
聴けていなかったことに気づきはつとす
る。

「うちの母親も別れた父親の悪口ばかり言
うしぎ。あいつらから半分ずつ血を引いてる
子どもにとって、母親の愚痴って私の否定な
んだよね」

「わかります。だから、親のことを好きにな
れなくて、自分のことも大切にできなくて」

「だよね。でも、生まれてきたからには必死

に生きるしかないんだよ、やつぱ。大切なものがなくなっても、また新しい大切なものとか作って」

似通った感性を持つているのに、彼女はわたしのように気を落としていなかった。眼光は鋭く、生きる活力のようなものをひしひしと感じる。缶コーヒ―は空になった。コーヒ―を飲めないわたしには、彼女がとても大人びて見えた。

駅まで送ると言ってくれたから並んで歩いた。ピンク色の駅舎を照らす外灯には、羽虫がたくさん集まっている。夜の潮騒は仰々しくて心細い。彼女は、乗車駅証明書の取り方を教えてくれた。帰りそうな彼女を引き留めるように言葉を選んだ。まだもう少しいっしょに話をしたかった。

「また会えますか」

「土日の夕方は大体海にいるよ」

そのとき、頭の中のスケジュール帳に予定が書かれた。夏休みの最後の週の土曜日はまた海に行こう。

「あと、お名前聞いてもいいですか」

「いいよ。雪って呼んで。君は？」

「立村です」

「素敵な名字じゃん」

このとき、下の名前を聞かれなかったことと、素敵な名字だと褒められたことが嬉しかった。まもなく下り列車が参ります、という接近放送が鳴った。放送に負けないように少し声を張って、彼女に向かって最後の質問を絞り出す。

「どうすれば、前向きになれるですか」

駅のホームに立つ前下がりがボブの黒髪が、波風に押されてはためいた。

「もう前向きになってると思うけど、また来週いっしょに考えよう」

電車に乗ったわたしに手を振ってくれた。

下浜という駅で、海から帰って来たのであらう女子高生たちが乗ってきた。新屋では、高校生たちがたくさん乗車して、一気に人の密度が濃くなった。暗くて味気ない風景と、高校生たちの話し声の中に、場違いな大学生の自分だけが浮いている。

電車で揺られながら、会ったばかりの見知らぬ女の子に、こんなに優しくしてもらっていいのだろうかと思いつつも、来週の土曜日をどこか心待ちにしている自分がいた。生きる理由と居場所が一つずつ増えたのが嬉し

かったのだ。

土曜日の昼下がり、再び電車に乗った。今度は一号車に乗って、降りるときに手間取ることもない。連絡先も交換していないのに会えるのが不安だったが、道の駅の裏側にある長い階段のところに彼女の姿があった。何やら、海に向けて画用紙でできた手のひらサイズのカードを掲げている。足音に気づいたのか、手すりにもたれて海を見ていた彼女が振り返った。

「立村ちゃん、こんにちは」

「こんにちは。一週間ぶりです」

「先週会ったときよりいい表情してる」

「そうですか？」

「そうだよ」

彼女は白いサンダルを履いていて、灰色のパーカーを羽織っていた。いっしょに、隣の手すりにもたれるようにして海を見た。

「綺麗ですね」

「天気もいいし、風は涼しいし。なんか落ち着く」

手に持っていた白いカードを、今度は青空にかざしている。そのカードには穴が開いていて、向こう側の風景が見えた。

「それ、なんですか？」

「これのこと？ 切り絵って言うの。ほら。」

こうして好きな風景にかざすとね、女の子の髪色が変わるんだ」

よく見ると、カードに空いた穴の左側には目をつむって微笑んでいる女の子が描かれていて、穴の形もふわりと広がるロングヘアになっている。青空にかざされた女の子の髪は群青色に染まっている。

「すごい！ とつてもかわいいです」

ついテンションが上がってしまった。何かをかわいいと感じたのは、かなり久々のことだった。

「ありがとう。私切り絵が趣味でさ、今日立村ちゃんが来たら渡そうと思ってたの」

「いいんですか？」

「全然いいよ。むしろ貰って」

わたしは何かを貰ってばかり。いつか、雪さんに何かを返したい。それか、誰かに何かを与えられるような人間になりたいと思った。

「風景に切り絵をかざすとね、少し元気になるんだ」

試しに、太陽の光で輝いている水面に、白

い画用紙でできた切り絵を重ねる。艶のあるさらさらな髪の毛のように見えるのが美麗だ。

「ほんとだ。なんかわくわくします」

「でしょ」

切り絵の中の女の子は、植物に重ねれば華やかで彩りのある髪になり、コンクリートに合わせれば大人らしいシックな髪色になった。どんなものにかざしてもかわいく映った。

「温泉から眺める夕陽はすごいんだよ」

「恥ずかしいので温泉はちよつと」

「もう少し仲良くなったら入ってみよう」

こくり、と伏し目がちに頷いて、その日は海鮮丼をいっしょに食べた。誰かと食べるご飯は、アパートで食べるご飯よりもずっとおいしくて、何より楽しかった。

夏休みが終わり、学校が始まっても雪さんと会う関係は続いた。切り絵を手帳に挟んで大学に通った。白い画用紙に描かれた女の子は、お守りのように勇気をくれる。寂しくなる帰り道は、切り絵をかざしながら帰った。日常の中にささやかな色めきが増えて、化粧水をつけたあとのほつぺたのように心が弾力

を取り戻し、潤っていくのがわかった。

長袖のシャツとアウターがあっても肌寒いくらいの気候が続いた十一月のはじめ、雪さんと温泉に入ったことがある。秋田県民は入浴料が五十円安くなるというのは、彼女が教えてくれたこと。タオルを二枚借りて、赤い暖簾をくぐる。

黒のセーターを折り畳み、シャツとグレーのミニプリーツスカートをすると脱ぐ所作と、金髪の髪を丸く束ねる仕草が丁寧だった。気心を知っている間柄に恥ずかしさはなかった。それよりも、数年経てば、わたしも雪さんのようになれるのだろうかという羨望が止まなかった。

内湯の温度が高くすぐにのぼせてしまい、階段を下り露天風呂へ向かう。

「見て。綺麗じゃない？」

西日がゆらゆらと反射して、天井と壁一体に光の波を描いていた。

「綺麗ですね」

つま先から湯に入る。内湯よりもずっとぬるいお湯が馴染む。大きな窓から吹き抜ける涼風は火照った体を冷ました。

「この夕焼けを見せたかったの」

湯船のへりに肘を置き、手と腕で顔を支えるようにして窓の外を見る。まだ位置の高い夕焼けから、粒のようなきらめきが一直線に揺れている。湯にも光が差し込んで、体いっぱい日浴びるのが心地よかった。このままずっと風景を見ながら、いつまでもお湯に浸かっていられそう。言葉も交わさぬまま、数十分はそうしてなだらかな風景を眺めていた。何も話してないのに、雪さんの感性に触れた気がした。

お風呂を出たあと、二人でコーヒー牛乳を飲んだ。

「温泉で飲むコーヒー牛乳っておいしいですよね」

「ほんとにおいしい」

道の駅の温泉には、テーブルがいくつも並んでいる休憩スペースがある。休憩スペースの眼前には窓があり、西日が眩しい。二人分の座布団を持ってきて、隣り合うように座った。大学に行くのも苦でなくなつて、以前ほど生活に悲観しなくなつたわたしは、一つ質問を投げかけた。

「友だちって、どうやって作ればいいんでし

よう」

「まず話しかけてみるとか？ 作るっていうより、気づいたらなってるものだと思うけど」

わたしは友だちですか？ とは聞けなかった。

「じゃあ、友だちってどんな関係だと思いますか？」

「いっしょに同じ時間を過ごす関係かな。ご飯を食べたり、お喋りしたり。恋人とか家族はさ、契約を経て関係性を確かめあうけど、友だちには契約がないから難しいよね」

「はい。大学も苦じゃなくなってきたので友だち作りたいなって思ったんですけど、そもそもどんな風に定義すればいいのかわからなくて」

「定義かあ。人それぞれ違うかもよ」

「それはそうなんですけど」

「色々考えるのも大切だけど、やっぱり運とタイミングはあるよ。大学生ならまず勉強して、やることをちゃんとやってれば、そういうタイミングが来るはず」

人間関係は誰かと築くものだからね、と付言した。

「興味ある人に話しかけてみて、相手の話を聴いてみるのもいいかも」

「いいですね。それ」

「立村ちゃんなら、すぐ友だちできるよ」

ぱつとしない表情をごまかすように水を飲んだ。

「どうしたの？」

「誰かとずっと友だちにいるには、どうすればいいんですか」

だんだんと、わたしの居場所になつてきた大学や、雪さんとのつながりも、永遠ではないのだと思うと物悲しくなる。花が枯れるように、おばあちゃんが死んだように、いつか終わりが来るのかもしれない。愛情の味を知っているからこそ、再びそれを失うのが怖い。

「遅かれ早かれ、どんな関係も終わりはあるよね」

しつとりとした声色は、霜降の寂しさを内包している。

「人間いつか離れるから、いまが愛しくなるんだと思うよ。友だちも、心の成長と共に変わってくる」

休憩スペースにある自販機で買った缶ビール

ルを開け、おもむろにそれを飲んだ。どんな味がするんだろうと思つてそれを見つめる。

「じゃあ、わたしもいまを大切にすることにします」

「いいと思う。人との出会いと別れは、少なからず自分の一部になつてゐるよ」

勇気を出して話しかけてみると、友だちとまでは行かずとも、話し相手になつてくれる人が大学にいることに気づいた。手帳に挟んでいた切り絵を、教室の机の上に乗せて眺めていると、切り絵を褒めてくれる人がいた。綺麗なものにかざして楽しむことや、大切な人が作ってくれたことを告げると、その子は感心してくれた。好きなものを好きと言つてもらえらると、感性を認められたような気がして踊り出しそうになる。

いっしょに温泉に入つた次の週も海に行き、雪さんに大学で切り絵を褒めてくれる人ができたと言げた。その子と友だちになれるかもしれないと伝えらると、笑つて喜んでくれた。海風は、刺すような冷気を纏うようになつていて、わたしたちの上着の隙間を縫うようにして体温を奪う。

「もう寒いですね」

「うん。月末には初雪が降るつて」

次の週から雪さんの姿を見なくなり、わたしも海に行かなくなつた。

気温が下がり人肌恋しくなる秋は、雪さんのおかげで乗り越えられたと思う。今年の冬はこの土地に居場所があるし、もうひとりぼっちじゃない。大学でも居場所が増える度に気を病むことが減つた。

岩城みなどの海を初めて見たときは、一人で見ても綺麗だと思えた。なのに、最後に一人で海を見たときは何の感動もなく、ただ侘しさと感傷を抱くだけだつた。

そこには、思い出の欠片しかないのだということを理解できた。手帳に挟んでいた切り絵も、いまは勉強机の引き出しにしまつてゐるのみで、すっかり持ち歩いてゐない。代わりに、学校の友だちと話す時間が増えた。

月末には予報通りの初雪が降りた。

十二月は一度も海に行かなかつた。土日は友だちと遊んだり、勉強したりすることが多く、悩んでいる暇はどこにもなかつたのだ。友だちの相談に乗ることも増えて、人から必要とされるようになっていた。

正月、成人式へ出席するため実家に顔を出すと、家族からおばあちゃんの話が出ることはなかつた。しかし、わたしも最近はそのほどおばあちゃんのことを思い出さなくなつていて、大丈夫になつてきてゐることに気づいた。相変わらずお父さんの悪口ばかり言うお母さんには辟易したが、受け流せるほどには大らかだつた。秋田に居場所がある、という確信が胸にあつたのだ。

悩むことが減り海に行かなくなつたとはいえ、実家へ顔を出せたことや、休日遊ぶ友だちができたことを雪さんに伝えたいとは思つていた。一方で、数ヶ月会いに行つてゐないのに、急に会いに行くのも面映ゆかつた。

心の補助輪が少しずつとれて、誰かに寄りかからなくても、自分の足で歩けるようになっていた。親やおばあちゃんがいちから、わたしには歩く足がある。雪さんは、行き先をいっしょに考えてくれて、歩き方を教えてくれた。

離れることもあるけれど、大切なものは作れるものだつた。

一月の暮れの秋田駅を友だちと歩いてい

た。コーヒーショップの前で立ち止まり、メニューを眺める。

「葉月ちゃん、何飲む？」

友だちは、わたしのことを下の名前で呼んでくれる。以前は両親につけられた名前が嫌いだった。でも、両親がくれた血肉と、自分で作ってきた感性の境界がくつきりしてから、真に自分を受け入れられるようになっていた。気心の知れた友だちが下の名前で呼んでくれたときの、心の距離が縮まった感覚に気づけるようになっていた。

わたしの憧れる大人はブラックの缶コーヒーを飲む人。頼むものはいつも決まっている。

「ドリップコーヒーかな」

「また苦いつて言うくせに」

「うるさいなあ」

駅構内を通る人の中、どこかで嗅いだことのある花のような懐かしい香りがした。思わず振り返ると、見覚えのある胸下まで伸びた長い金髪の後ろ姿。

釣られて友だちもわたしの視線の先を見つめた。

「知り合い？」

「うーん。なんて言えばいいんだろう」

数秒考えてから口を開いた。

「歩き方を教えてくれた人」

詩

一 詩

最優秀賞

空如―声なきものに筆を向けて

大仙市 高橋 岑 夫

新聞は読まぬ

外の世界はあまりにも騒がしい

展覧会には出さぬ

人に見せるために描くのではない

仏の前に沈黙を置くための筆

朝の光

水をうつす鉢の波紋

ひとのいない部屋に

墨の香がたちのぼる

静かに

仏の目をうつす

誰にも見られずとも

仏は見ている

金堂の奥

褪せかけた赤に

わずかに残る緑に

息を吹きこむように

その線はただの線ではなかった

過ぎし時間と

いまだ届かぬ祈りのかたち

鉄線描

凹凸の陰影

透視の奥に

誰も知らぬ遠い山

そこに住まう仏たちの気配を

空如はひとり受け取った

その筆の音を

誰かが聞いたわけではない

その色を

誰かが褒めたわけでもない

それでも

描かねばならぬものがあつた

それは教えではなく声でもなく

形にならぬものの静けさ

火の前にすでに仏は筆にうつっていた

空如の背には誰の影もなかった

ただ仏がいた

そして紙の上に仏は戻ってきた

奨励賞 月見草の花言葉は

大仙市 鈴木 仁

この星を包み込むという

地球温暖化を

見向きもしない

あまりにも人間的に

大きくなり過ぎた

恐竜の脳は

その未来の一点において

絶滅する歴史を

いまや遅しと

拍車をかけている

みな夏の暑さを

口にしながらも

権力というイヤホンをしている耳に

地球の悲鳴が

聞こえるはずもなく

瞞しのニューデールを

繰り返すだけの

年老いたリーダーたち

やまない紛争も

激しい気温上昇も

情報の豪雨に流された

瓦礫のひとつだとしても

ミサイルの穴の切岸で

ようやく晴れた青空を

目指して花は咲くだろう

見えない

爆撃機から

真夜中のハンマーが

振り降ろされても

戦争は終わらなかった

ただ敵対する国々が

互いに勝利を宣言し

次のステージが

始まっただけだった

どんなに時代が変わっても

諍いの心は利己的で

取扱い説明書を読まずに

すべてを壊してしまう

いま核施設に開いた穴からは

またブルームが溢れ出して

一週間もあれば

奨励賞 Parallel (パレレル)

潟上市 真壁 悠花

空と海が繋がって
その青が滲むとき
どこか遠く

行ったことのない場所へ
扉が開くのが見える

その扉の先にはきつと
知らぬ世界が待つて
知らぬ私がそこに
そんな平行線が見える

扉が閉じた
雨に打たれて
現実に揉まれて
その理想が霞むとき
理想の青が滲むとき

行きたい
生きたい

どこか遠く
行ったことのない場所へ
いきたい、

と叫ぶ私の心は
本物なのか
作り物の何かなのか

教えてよ、つて
たぶん本物の今の私が
たぶん未知の世界の私に
見えぬ地平線に問いかける

入選 夏ズイセン

にかほ市 鈴木敏男

暑い日の朝に僕は生まれたらしい・・・
終戦の翌々年の朝らしい
僕の誕生を祖父はことのほか喜んだようだ

帰還した父の喜びも大きかっただろう
出征した夫に代わって汗しただろう母にも
長子を産んだ喜びは一入だっただろう

戦後八十年、この夏もまた庭の片隅には
潜んでいた魂を一気に突き上げんばかりに
花が咲いた

夏ズイセンである

誰が植えたのかは分からない
何故植えたのかも分からない
花言葉は「深い慈しみ」だ

いつだっただろうか

この花の周りを除草している母を見た
普段は葉を見る事もなく

そこにあることを知っている家族はいない
おそらくはこの存在を知っているのは
植えたひとであり

植えたのは母ではないか・・・
球根ゆえに普段は隠れているし
植えたのはやはり母だ

いつだったか僕に村のある人が言った・・・
君の祖父は長男の孫が誰よりも大事で
父も母も我が子としての君を
抱く事すら出来なかったようだった・・・と

母が母親としてあやせぬ思いは
いかばかりの事だったのか
祖父に気兼ねをし

わが子を目いっぱい抱きたかっただろうに
それを見ていた父だつて
どんなにか苦しかっただろう

そんな母が

僕へ手向けたかった愛を
この花に思いを託したのでは・・・

花言葉は他にもあった
「遠い悲しみ」と・・・

その母は植えたことを語ることなく
黄泉の国に旅立つた
その日もまた夏の暑い朝だった

入選 ある試験の日

秋田市 小野 佑 真

吊り革を 掴んでいない手で
教科書を にぎりしめる朝に

空を翔ぶ ムクドリの群れは
夏蜜柑の陽光に あおられて
ラムネの青に プワリと浮かぶ
わたあめを 自在に切り分ける

水兵リーベ

ぼくの船

七曲りシッパス

クラークか

時々開くドアが 迎え入れる
生ぬるい暑さを おいはらえ
特別な呪文のように 僕はただ
ひたすら ひたすら 繰り返す

去年見た 海の色をした靴へ
教科書を しまい込んだ頃に

住宅地と 高層ビルの群れは
麦藁色の地面に 影をつくり
泳ぎ疲れた顔をした 僕たちに
「頑張つて」と エールを送る

水兵リーベ

ぼくの船

七曲りシッパス

クラークか

時々開くドアから 吹き出す
生ぬるい冷気を 浴びながら
七夕の祈りのように 僕はただ
ひたすら ひたすら 繰り返す

棕の木 の 座席の背もたれに
汗ばんだTシャツを 預けて
もう一度 心の中でつぶやく

水兵リーベ

ぼくの船
七曲りシッパス
クラークか

今だけの 効力を持った魔法と
手にした 星空柄のシャーペン
目の前の 解答用紙はもはや 僕の味方だ

グリーン賞 この空白を埋めて

秋田市 堀 井 航太郎

僕たちにはみえない

弱りゆく肢体も

生命を奪う閃光も

積み上げたものが崩れる瞬間も

目を背ける僕らには映らない

僕たちにはきこえない

彷徨える魂の叫び声も

子を喪った母の慟哭も

「まだ生きたい」と藻掻く頼りない抵抗も

傷つかない僕らには響かない

僕たちには味わえない

大気を舞う血と硝煙の臭気も

苦し紛れに嚙んだ砂の舌触りも

何kgの装備より堪える家族写真の数g

映像に慣れすぎた僕らは感じない

判っていると思っ込んでいた

僕たちはなにも知らない

引き裂かれた心の痛みも

荒野で受けた銃創の膿も

溢れ出す大粒の涙の味も

身近な人びとの大切さも

失わない僕らには なにひとつわからない

この眩きだつて

惨禍から程遠い所で

残酷なほど無知な者が生む

妄想でしかないというのに

グリーン賞 失望の海

能代市 佐藤 遼典

私は失望の海を泳いでいます。
雨に濡れたアスファルトが
脆弱な心を映す鏡のよう
誰も気づかない、私の沈む音

私の視界に映る人々は
スマホを覗き込んでいる
偽りの微笑みと「いいね」の数
価値を競うゲームの中で
誰も私を見てはくれない

残酷な他人の視線は刃のように突き刺さり
同調への嫌悪が胸を締め付ける
けれど、水面に映る自分の顔は
破滅への憧憬を囁き

無への願望が背中を飲み込んでくる

夜が来て、街灯の下で立ち止まる
空しい自分を抱きしめながら

私は思う

この社会という海原で
私は、ただ流される波でしかない
枯れた海は
同じ明日を見せ続け
偽りと拒絶と
ほんのちよつとの愛情で
明日も生きていくんだ

短 歌

短歌

最優秀賞 終戦八十年

秋田市 鈴木修一

古き記事見返す間なく膨れゆく戦後八十年のスクラップ帳
かさぶたを剥ぐ心地せん黙し来てついに戦争を語らん人は
殺生戒おかす戦争は罪惡と唱え戦中を翻さざる
相愛のひかり珠とし灯しおく胸に抱きしか夫の戦死を
旅先のテレビに子らと悼みしよ広島島の朝被爆の刻を
被爆して逝きし少女のワンピースおしやれ心をひそと遣せる
放たれし鳩は自ずと群れ立ちて原爆の来し空を埋めゆく

奨励賞 母への手紙

にかほ市 佐藤美知子

施設にて暮らせる母の日常をいつもカメラにのぞいていた
ガラス戸をへだつる母に「げんき」かと問えば小さくわれに頷く
面会の出来ぬコロナ禍わが書きし母への手紙百通を超ゆ
微笑みを浮かぶるさまに見えながら母はうつつのまなこをとじる
亡き母が日日使ひたる手鏡のくもり拭へばあふるる光
亡き母が傘立てて雨をしのぎたる白き牡丹のおもたげに咲く
母逝きて残れる古き和筆筒の樟脳の香は過去世のごとし

奨励賞 ルソンの父は

井川町 遠藤惠美子

終戦ゆ^{やそとせ}八十年過ぎしこの夏はルソンの父をしきりに想う
戦争の悲惨さ酷さを伝えんと壇上に立つ遺児なる吾は
戦争の知らざる人の多かりてとつとつと語る反戦の思い
ルソンにて戦死の父の五十回忌父に届けと歌いし「ふるさと」
この世にて一度も会うことかなわざり山に向かい「父さん」と呼ぶ
涙してルソンの山を巡りし日のあの暑き夏忘るることなし
この星に戦の絶えぬ現世^{うつしよ}を嘆きていんかルソンの父は

奨励賞 合掌

鹿角市 金万和

仁王門潜れば伽藍目の前に鮮やかなりし苔石を行く
再びの観音堂の木戸を開け懐かしく嗅ぐその匂いをば
チヨロチヨロと手水場に落つ真清水の飛沫^{しぶき}に遊ぶうわばみ草は
我足りぬ事問う為に訪ねれば仏像は黙しじつと目を見つ
この齡健やかなるを請いければ床しき参道梵鐘の鳴る
我肥やす術求め来て山門を潜れば釈迦像大きく見下ろす
心閉じ然れど前向き境内に手合わす十指に六地藏の笑む

入選 友

鹿角市 高田 勝彦

今年またこれが最後と来る賀状律気な友の老いを笑えず
「呼び出しの声で君だと判ったよ」わが腕掴む友は白杖
「老けたなあ」「君ほどでは」とクラス会みな師の貌で肩叩きあう
微笑みの裏にどれだけ隠したか遺影に偲ぶ友の悲しみ
「まあ上れ」言葉少なに汲み交わす和解の鍋に眼鏡曇らす
生きて聞く友の弔辞に嘘はなく生前葬は笑いさんざめく
アルバムに重なりあつて早や傘寿君は十五の頑是なきまま

入選 父の背

八郎潟町 北嶋 香奈子

カモシカのような優しき目を向けて父の野性を再び見たとき
五ページに落とされた染み許そうか父が私を許したように
チョコパフェを食べ終えるまで童心のひげの無精をただ見つめおり
不自由なお尻を幾度取り替えて私は誰のために泣いてる
父の背をとつくに越えて夏至の陽の青々として衰えもせず
遠くから見ても分かりし父の背は鉄より寂し骨の浮き出る
父だけが手を振っている向日葵の群れの中から母の愛しき

入選 猛暑日つれづれ

由利本荘市 佐藤 精子

猛暑日は山家に籠りパソコンで歌や詩を書きエッセイ綴る
文字並べ指折り数え推敲し脳かき回しことばで遊ぶ
老軀ゆえ力仕事はちよつと無理あたま掻きかき言の葉探す
新聞に投稿たんか載った日は夕餉の菜を一品増やし
初めての詩が地元紙に拾われて泥鰌さがしの投稿つづく
農に生き自然に埋もれ歳重ね残る月日も流れのままに
来世など未体験ゆえさておいて猛暑に耐えて今日を生き切る

入選 家

にかほ市 鈴木 敏男

リフォームを繰り返しつつ七十年昭和染み入るこの家に住む
床の間に槐の古木据えし父祖 永遠の幸い願う証しか
子の夢に縛りかけまじ時折に帰省すること喜びとせん
残るのも先に逝くのも大差なし同年夫婦のわれらの末路
高齢化率の高まる村に住むわれらふたりもそが率上げて
歳月を農に勤しみ来しなれど今は肯う感慨なくも
父と母われらの名前の刻みいる朱入りの墓誌の汚れ浄めり

入選 ユー・エン・ミー

北海道札幌市(秋田市出身)

ヲ　ワ　リ

深緑と花蹴散らしてぼくたちは共犯者だと指差されたい
朝露で生傷を癒す茶番劇！　おまえがいない幾度目の春よ
遺された沈香に想う　かの瞳が焦げついたチョコのようだったこと
逆光のあなたが差し出す左手の、腕の、真つ赤な命綱の数
わたしたちは天秤の向こう岸にいる　そういうふうにも生きている
嵐抱き雷雨踏みつけるバラノイア　君を泣かせたすべてが罰だ
散骨として砂浜に枝で刻む“You and Me”を波が連れ去って

グリーン賞 雪の感触

秋田市 柳 原 知可子

テレビ越し今日も変わらぬ雪予報白い景色が眩しく映る
結晶が震えた手へと舞い落ちて初めて知ったその暖かさ
さわれない線で結ばる星たちと僕らの心はどこか似ていて
新雪に残る足跡交差してどこかに見える人の営み
「ただいま」と静かな部屋のストーブの返事を待ってただ睨めっこ
あたたかな空気の中で口にする氷菓の味はどこか切なく
窓の外白く塗られたキャンバスに自分の色を載せてみようか

俳
句

俳句

最優秀賞 豊饒

能代市 岸 部 吟 遊

海山のあはひの棚田耕せり
稲の花一重臉の赤ん坊
田の中に代々の墓稲穂波
ひもすがら見得切る目玉鳥威
加勢立てのささら踊や盆帰省
出羽富士は雲を豊かに今年米
田の神へ産土神へ新走

奨励賞 仁王尊

由利本荘市 佐々木

豊

筋骨の締まる仁王や寒の寺
鋤深き仁王の眉間大寒波
春風や忿怒緩めぬ仁王尊
楼門に仁王の貫禄雲の峰
雷鳴や昂る仁王の力瘤
暗闇に仁王の眼力虫時雨
剥落の阿吽の仁王秋の声

奨励賞 村の未来図

三種町 三 浦 静 佳

草の市スーパ一の無い村に棲む
門火焚く下駄の音なら父であり
掃苔や熊目撃のアナウンス
盆三日棄田の草に立ち止まる
棚経の少年僧のいた昭和
パプリカに近づく村の隙間かな
盆の月村の未来図探しおり

奨励賞 掛唄

横手市 藤 井 ただし

葺き替えの奥宮光る豊の秋
陣立のごと幟立つ秋祭り
老杉の奥の掛唄霧襖
掛唄や手斧削りの荒格子
掛唄に挑む少女の眉清し
掛唄の露結ぶ間も鬨ぎ合い
掛唄の朝霧晴れて勝名乗り

入選 浜の村

由利本荘市 佐々木 成

高々と風囲して村黙す
沖暗し吹雪まみれの登校児
百万遍の鉦の音凍つる浜の村
風花やロシア語刻む海難碑
刺し子縫ふ母の手かざす囲炉裏端
出稼ぎの父の文読む寒夜かな
寒の波とどろく中に村寝落つ

入選 全校登山

にかほ市 佐々木 亮子

記念樹の桜とあゆみ七回忌
陰日向なく生きし夫あたたかし
しんがりをつとめ全校登山かな
父と子の教師の道や茄子の花
どの部屋も夫の遺品や梅雨深し
魂迎へ相談ごとの二つほど
身に入むやかすれし文字の工具箱

入選 弥勒菩薩

秋田市 松 井 憲 一

久に訪ふ弥勒菩薩や草青む
嚙のこゑのみ今朝の弥勒佛
半跏坐の弥勒菩薩の清らかな
睡蓮や弥勒菩薩の思惟しづか
弥勒菩薩月の光に濡れ今宵
印むすぶ弥勒菩薩や天高し
弥勒佛へ一筋のみち冬ぬくし

入選 萬固山にて

秋田市 富 野 三千雄

参道を囲む大樹や半夏生
夏燕観音菩薩の手の上を
御霊屋の赤き唐破風緑さす
山門の柱に残る蟬の殻
床下をぬける涼風萬固山
五庵山ただだ蟬の声ばかり
白亜なる仏舍利塔や蟬しぐれ

入選 母逝く日

秋田市 阿 部 祐 子

あたたかやささいなことも褒めし母
花の昼車椅子より母立たす
更衣母の好みを揃へけり
入所後の帰宅祝ひし秋日かな
握る手に温み移さむ冬来たる
搏動の長き旅終ふ春の朝
母逝くや九二歳の春のこと

入選 余生

能代市 塚 本 佐 市

余生など知る由もなし柿の花
あらためて帰郷のここち駅風鈴
西日いよ家をつらぬき二人老ゆ
葉得てその数多し盆用意
ひぐらしや樹間に夕日ぶらさがり
餅干すや城址の空が日を宿す
花柊散りても香る白さかな

入選 雪国に住む

湯沢市 高 橋 雄 子

湯婆のぬくみや猫と分かち合ふ
小魚のひとかたまりや冬の川
冬の雷アンモナイトが動き出す
誰も来ず何処にも行かず四日かな
ストーブの葉缶滾るや昼休み
両腕はおもちやのシャベル雪達磨
猛吹雪裂きてピンクのこまち号

入選 いじくへ

秋田市 米 沢 由紀子

ことのほか小さき土偶や青葉木菟

木の実落つ竪穴住居跡の穴

この石はかつて鏝か月冴ゆる

甕棺墓大小混じり秋の暮

名は無くて払田柵跡天高し

香木は橋の名となり朧月

百年に一度の蓮の花開き

グリーン賞 秋田の秋

秋田市 成 田 伊 吹

じいちゃんの節くれた手に赤とんぼ

そつくりさんススキと空のほうぎ星

キリギリス旅立ち前夜のコンサート

祖母なりの仕送り術は干した柿

盆休み俺は「帰る」で君は「行く」

子と共に品種改良精霊馬

実家よりどんぶり送る孫の家

川

柳

川柳

最優秀賞 迷界吉祥

秋田市 和田 仁

戦場にそれは見事な二重虹
塹壕で過ぐす涼夜のカルテット
地雷原一飛びしたる黒揚羽
焼け跡で遊ぶ子供の水鉄砲
雨水を掬い上げたる水中花
ジプシーと言う名の猫です晩夏光
夕波がウインナ・ワルツを奏で居り

奨励賞 春を知る

秋田市 菅原 浩洋

ふる里のあちらこちらに秘密基地
わんぱくの冒険見てたちぎれ雲
花を愛で人を愛して春を知る
咲いて散る花一輪の美しさ
ふりかざすものがなくても生きられる
人というかたちで水になる氷
一房のぶどうが熟れて捨てる自我

奨励賞 晩夏

秋田市 荒木 小菊

出目金と夏の暑さを分かち合う
物がたり終わつたように蝉が鳴く
近寄つて近寄つて昼顔を撮る
団扇絵にへちま二つがぶら下がり
子等の釣る雑魚を数えている晩夏
仏前にどんと動かぬ大西瓜
いつまでも沖を見ている夏帽子

奨励賞 続編をつづる

秋田市 三浦 千両

新しい權でのり出す次の章
シナリオは三原色を掻き混ぜて
反省を刻む正座のひざこぞう
駆け抜ける坂でいくたび句読点
挫折したあの日の骨が太くなる
この角を曲がれば過去はもう喜劇
朝もやのブルグレーにある期待

入選 オノマトペ

秋田市 小松 隆義

がはははと笑う男の照れ隠し
いざという時はおろおろする亭主
きんきらきんママだけ目立つ参観日
ぬくぬくと懐肥やすボス議員
ちやらちやらと安い男の独擅場
しやしんと終れば酒になる会議
ぴーしやら祭り後の虚脱感

入選 百歳と云う綾

五城目町 鷺 谷 凡 葉

百歳に願いを秘めて胸を張る
百歳の内示を生かす処方箋
人柄に百歳の粹刻む智慧
百歳のカルテを生かし第二章
百歳に健康余命問う非情
百歳を生き永らえた母の意地
百歳を天寿に乗せた神の聲

入選 言葉

大館市 岩 谷 隆 史

ふところに消えぬ一灯師の言葉
胸を打つ言葉を杖に生きている
言葉より握り返した手の温み
何気ない言葉が時に心打つ
ありがとう嬉しい言葉残ってた
日本語のひびき嬉しいありがとう
ひと言が生きる支えになりました

エッセイ

エッセイ

最優秀賞 お見送り、 そしてお出迎え

仙北市 渡辺 礼 司

スマホのラインに妻のメッセージが入った。

「十九時三十八分。神代駅着。迎えようしく」

やれやれ、ハイボールはあと二時間お預けだ。買い物に行き、夕食を準備し、好きな酒を我慢してじっと待っていたのに……。妻の連絡は川柳みたいにいつも短く素っ気ない。ハートマークのスタンプを一個加えるとか、もう少し愛想があるものにできないものだろうか。七十七歳の亭主はため息をつく。

妻は私より十歳年上の八十七歳である。数年前から秋田市の「朗読の会S」に通っている。高齢者の交通事故が頻発する中で、車をやめ電車で行くようになった。普通列車の時は最寄りの神代駅。新幹線の場合は隣町の角

館駅が発着駅となる。毎日一時間のウォーキングが日課の妻は健脚を誇る。神代駅へは平気で歩いて行けるが、天候などの諸事情で、ほとんどの場合は送り迎えが必要になる。帰り時間は未定。出先からラインで知らせてくれる。

妻との十年という歳の差を改めて感じさせられるのが、八十年前に終結した太平洋戦争だ。終戦の年、昭和二十年をはさみ、戦中派の妻と戦後派の私に分かれるからだ。国民学校一年生の時、東京から長野県へひとりだけで学童疎開した話や、港区青山にあった家を東京大空襲で焼失した話などを聞かされると、隔世の感ありで黙って拝聴するしかない。あの戦争は幼い私にとって「空腹の辛さと家族と離れた悲しさだったなあ」と妻は実感を込めて語る。

「朗読の会S」は、元テレビ局のアナウンサーAさんが主宰している。毎年、秋田市の「アトリオン」小ホールで発表会を行っているが、戦後八十年の今年、それとは別に「戦争をテーマにした朗読会を二人でやってみようよ」。Aさんにそう誘われたのだという。秋田市通いも疲れてきて、もう限界かなと考

えていた妻に再び火が着いた。このため、秋田市のスケジュールが新たに加わり、にわか忙しくなってきたのである。

「ね、聞いて。S紙が発表会の取材に来るんだって」

車に飛び込んできると、妻はいきなりそう言った。今回の公演会場はAさんの友人が経営するカフェで、午前と午後の二回に分けて行われる。五十名限定の小さな集まりなのだが、朗読の会のテーマが、戦後八十年問題を扱う新聞社の様々な企画とフィットしたらしい。朗読するのが戦争体験者であり、八十七歳の高齢女性だということも、地元S紙文化部記者の興味をひいたようだ。

妻は公演前日に秋田市に行き、会場近くのホテルに前泊することにした。私は仕事の都合で行くのは断念し、角館駅で見送った。

「じゃあね」と私が手を振り、「連絡入れるね」と妻が答える。見送ることが増え、見送られることが減った。だが、惰性的とも思うこの送り迎えが永遠に続くわけではない。遠くない時期、どちらかの都合で終わりを迎える時がくる。何気ない日常のやり取りを、もっと新鮮で大事なものとして扱うべきなのか

もしれない。

「公演は大成功。神代駅十九時三十八分。迎えよろしく」

翌日の夕方、連絡が入った。大成功、という短いメッセージの中に妻の踊る心が感じられる。半額で売っていた和牛の小間切れと、長ネギとシイタケと糸こんにゃくを合わせて買った。肉の少ない簡素なすぎ焼きだが、わが家では贅沢なほうの夕食である。

「S新聞の女性記者、今回は私を主に取材したようだよ。なにせ私はもうすぐ八十八歳だからね」

すぎ焼き鍋の前に、妻は熱を込めて語り始める。今回の朗読会では、自分でも納得できる収穫があつた、と嬉しそうだ。「力みがなく、自然体で」朗読することができたのだという。演劇学校出身者で、一本気で一途な氣質の妻には、確かに演じすぎ力みすぎの傾向がある。Aさんにはしばしばそれを指摘されていたようだ。今回は「スーッと力が抜けてできた」のだという。ほんまかいな？ 私はついそんな言葉を口に出しそうになった。

百歳の女性作家、佐藤愛子作品を朗読した時は、ご本人に似せた和服の風采と熱演が観

客を喜ばせた。力みはあつてもそれが妻の個性であり、力を抜くことだけを意識してどうなるものか。そんな疑問が残つたが、「何かをつかんだ」と喜ぶ妻に水を差す必要もなからう。角が立つだけだ。へえ、そうか、なるほど。と相槌を打ちながら、私はお預けとなつていたハイボールを、乾杯なしの手酌で飲み始めていた。

二日後、朗読会の様子がS紙に掲載された。八十七歳に敬意を表してだろうか、主宰のAさんを脇に置き、妻を主役とした写真入りの記事となつている。妻も私も、劇団W座の舞台を降りて長い「主役となつて何か表現したい」という気持ちはまだ残っている。折りが合えば「歳の割に凄いいねえ」と、人様が驚くようなパフォーマンスをやつてみたものだ。この点では妻も私と似たようなものだ。共感しながら、私はその記事を目で追いかけていた。

視野が狭くなり眼科に行くと「脳神経外科の領分です」と言われた。CT検査で脳梗塞の跡が見つかり、薬が増えた。老化は確実に進行中だ。妻は佐藤愛子にあやかり、百歳まで生きると豪語する。私にその自信はない。

妻を送迎する回数は増えたが、最後は妻に見送られ、そのまま行きつばなしになる予感がある。待てよ。その時妻が百歳なら私は九十歳だ。平均寿命をゆうに超える。そこまで生きられたら御の字ではないか。よし、妻よ。百歳まで生きろ。

奨励賞 糸

能代市 杉山靖広

遙か遠い記憶の糸をたぐつてみた。

私は、木の町に生まれた。町中に製材機械の甲高い音が鳴り響き、清新で艶やかな木の香が満ちていた。木とは秋田杉である。ふるさと能代は、秋田杉の町そのものだった。

米代川河口近くの貯木場には、上流から筏に組んで運ばれてきた杉丸太が山積みされていた。その丸太を馬車やボンネットトラックが、町中の製材工場に運び入れた。工場では、男女の工員が忙しく立ち働き、丸太を板に加工したり、柱や様々な建材を生み出したりしていた。町は喧噪と活気に満ちていた。

米代川流域は天然秋田杉の宝庫である。その河口に位置する能代は、古くから秋田杉の集積、加工、移出の港町として栄えてきた。

古くは文禄二年（一五九三）、檜山城主安東実季が豊臣秀吉の求めに応じて上方に秋田杉を送っている。秋田杉は朝鮮出兵の軍船となり、また伏見城の用材ともなった。江戸から

明治期、北前船によって能代港から積み出された主要品は秋田杉であった。

明治中期、学生時代に福沢諭吉宅に寄宿した経歴をもつ井坂直幹が、能代の地で機械による製材に成功した。それは、木材業の産業革命となった。明治四十年（一九〇三）直幹が設立した秋田木材株式会社（秋木）は、全国の主要都市に支店や工場を開設し、その販路は海外にまで広がった。町中には、秋木をトップとした木材加工の事業所がひしめいていた。能代は、東洋一の木都と称された。

地元小学校の校歌には、「わが東洋に類いなき 製材所もて知られたる いとも住みよき能代港」という一節があった。

木の町の記憶から半世紀以上の時が流れた。木材産業は衰え、町は様変わりした。工場は郊外の工業団地に集約され、賑わいと木の香が町中から消えた。特色を失った町を静寂が覆うようになって久しい。

しかし、この町の中心部には木都の象徴が残っている。旧料亭金勇である。昭和三十一年（一九五六）の大火が隣接する神社にまで及びながら、奇跡的に難を逃れた建物であ

る。金勇は昭和十二年（一九三七）、二代目金谷勇助によって建てられた。木造総二階建ての豪壮な和風建築物である。

建築に当たっては後援会が組織され、営林署の協力も得て作られた。当時の能代営林署長は、「どうせ作るのなら秋田杉の建物として後世に残るような立派な物を」と、資材の調達に全面協力した。この言葉があつて、能代市二ツ井町仁鮎の国有林に初めて斧の音が響き、金勇の資材となった。大広間の床柱は、毛馬内営林署管内からイタヤカエデの巨木が調達され、舞台の床材には、大館市早口産のヒバが選ばれた。

こうしてできた金勇は、二階大広間に樹齢二百六十年の天然杉から切り出した一畳大の全面柵の板材が凸型の格天井に組まれた。

一階中広間の天井には、一本の丸太から取った五枚の板が据えられた。その長さ九・一m、幅は一mある。貴重な無節の中柵板である。腕のある木挽き職人が、一枚につき四日をかけて切り出した。

両天井は、全国から訪れる建築関係者が感嘆の声を漏らす逸品である。見上げる人に木都の誇りが降り注ぐ。

料亭金勇は、日本の高度経済成長とともに大いに繁盛した。大小の宴会、著名人の来訪が引きも切らず、華やき輝いていた。

私も友人知己の結婚披露宴、各種の祝賀会などの折り利用した。金勇は、晴れの日に訪れる特別な場所であった。

隆盛を極めた金勇であったが、時代の流れと後継者難から平成二十年に料亭の幕を下ろした。四代目当主は、「この建物を後世に残したい」と願い、能代市に寄贈した。能代市は、観光交流施設として甦らせた。

時代と能代の地に望まれて存在する金勇。金勇は、時を超えてこの地の人々に愛されてきた。現在も、拭き掃除や落ち葉掃き、除雪に励んでくれるボランティア、書画や生け花を定期的に提供してくれる人、維持管理に協力してくれる人。たくさんの人たちが支えている。

金勇がいつの時代にあっても、「木都の象徴」、「天然秋田杉の殿堂」としての姿を保つてこられたのは、人々が心のより所として大切に思ってきたからに違いない。

私は、地元教員を定年退職したのち、縁あってこの施設に勤めることができた。

ある日、金勇をたびたび訪れる外国籍の男性に、金勇の魅力を尋ねてみた。すると、

「第一に日本らしいこと、次にいつ来ても落ち着けること。そして何よりも皆がこの建物を大切にしていること」と返ってきた。ふるとドイツのヴィラ・ヒューゲルと雰囲気がよく似ているとも。ヴィラ・ヒューゲルは、ドイツ西部の都市エッセンにある鉄鋼王の壮麗な邸宅である。ドイツの誇る貴重な文化財に似ているという雰囲気は、この建物の歩みと人々の関わりが醸し出すものなのであるう。

私は、五年間を金勇で過ごし、この建物の魅力と価値に心惹かれ続けてきた。

そして、この春四月からは、ボランティアガイドとなった。見学訪問は、個人・団体の一般観光客、学習目的の学校関係者、観光業者の視察など多種多様である。老若男女が全国各地から年間一万人以上訪れる。最近はいンバウンド関係が急増している。

臨機応変、柔軟な対応を心がけつつ、木都の歴史とその象徴を後世に語り継ぎたい。私を形作ってくれたこの町の記憶を次の世代に残したい。

しなやかな糸となって……。

奨励賞 バスを買う

湯沢市 高橋 文子

足倉山あしくらやまの裾野を、新緑が駆け上がって行く。山の頂にはまだ雪が残っている。星野富弘さんの本にあった「芋植えツツジ」が咲き始めるのは、まだ、もう少し先だと思っていた。

学生時代の友人と、私の娘二人を連れて、富弘美術館のある群馬県に旅行してから、もう三十年にもなる。年賀状代わりに届いた手紙に、「雪が融けて、暑い夏になる前に、会いに行くね」とあった。再会を心待ちにしていた。

六月はあつという間に来た。風は、まだ若い青田の稲をなでて、通り抜けた。

道路から少し上ったところにある家の前に立つと、集落が見渡せる。ゆるやかに楕円を描いたような道路の、内側と外側に家が点在している。楕円の内側は田んぼと川、外側は山。三十年前には無かったアーチ型の大きな

橋が、向こう側に見える。橋が架かった頃の話、母は懐かしそうに彼女に話した。

「ご飯時になると、じいちゃんが、あの橋のバスの所の畑から軽トラに乗って来るのが見えるんだよ」

「あ、見つけた。バスがある。あそこに畑があるんだね。……え？ バス？ どうしてバスがあるの？」

私たちが旅行した数年後のことだった。

神奈川に住む、観光バス会社に勤めていた母の同級生から電話があった。話を持ち掛けられた父は、

「ほお、んだな。いがべ」

の三言であつさり承諾をした。路線バスが三台、車検の有効期限切れで廃車になるという。北海道に運ばれて再利用される前に、ほしい人はいないか、ということだった。若い頃、出稼ぎで関東や愛知でダンプカーに乗り、道路工事などに携わった父は、大の車好きだ。小さい男の子たちが「はたらく車」にあこがれる気持ちそのままに、バスを買った。

一台一万円。バスを買いに行くのに同行し

た親せきのお兄さん二人に十万円ずつの手間賃。三人で一台の車に乗り、神奈川へ向かった。手続きを済ませ、予定通りバスを一台手に入れ、交替で運転して帰って来た。往復約一日半のその道中、三人がどんなにワクワクしていたか、想像しただけでもおかし。

バスを買うなんて、思いも寄らなかった。

一万円だからといって、買ってどうするのだ。田舎だから置き場所には困らないが、それを運転して買い物などにも行けないだろう。しかも、わざわざ神奈川まで行って買ってくるというのも、信じられなかった。私たち家族の思いをよそに、父の心の中ではどんな夢が広がっていた。

バスを手に入れた父は、早速やってみたいことばかりで、希望に満ちていた。

孫四人と母をバスに乗せ、何度か集落を一周した。おやつ持参で、近くの山に遠足にも行ったという。父がバスの運転席から見た景色、乗客となった孫たちと母がバスの窓から眺めた景色は、どんな風だったのだろう。

「あれは本当に面白かった」と、母は目を細めて笑った。

娘たちはよく、バスに乗って遊んだ。通路を歩き回り、吊り革にさわりうとしてみたり、降車ボタンを押してみたりした。運転席でハンドルを握り、運転士になったりもした。

母が膝が痛いと言った時に父は、一人掛けの座席を外してきて、ソファアーにした。

吊り革の一つは、外の洗い場のタオル掛けになった。

雪が積もれば、雪降ろしをする。バスの広い車内は、畑で収穫した大豆や小豆の格好の干し場となっている。

乗りものの模型を作っている会社の人が、東京から訪ねて来たのには驚いた。この型式のバスを探して、調べたり聞いたりを繰り返して、ついにここにたどり着いたという。都会の路線で何万人もの足となって活躍したバスが、今、この秋田の山村でひっそりと佇んでいる。やっと見つけた喜びで、

「嬉しいです。良かったです」

と、その人は何度も言い、車体のあちらこちらをくまなく撮影していったという。

「どうやってここを探し当てたのだろうね。」

時空を越えた、気の遠くなるような話だけれど、すごいね」

次々と繰り広げられるバスの話に、驚き、笑い、時々質問しながら、彼女はとても楽しそうだった。昔と変わらぬ彼女の笑顔が、私は何よりも嬉しかった。

実に久し振りに再会した私たちは、この三十年のそれぞれの人生を、とことん語り合うのだろうと思っていたが、結局は、バスの話で盛り上がり一夜が明けた。

湯沢駅に彼女を送って行く車の中で私たちは、これまでのことよりも、これからのことを多く話した。学生時代と比べたら、もう、将来と呼べる時間は半減しているというのに、行ってみたい場所や、してみたいことなどを、思い思いに話した。

「お父さんを見ていると、人生を楽しく豊かにするために必要なのは、好奇心だと思うね。それと、創意工夫だね」

小学校の先生である彼女に父をほめられ、少しくすぐったい気もしたが、柔らかな、優しい風に包まれている気分になった。

「ねえ、今度はバスの所に行きたいな」
そう言って彼女は電車に乗り込んだ。

入選 愛猫の記

秋田市 鈴木修 一

世の中に○○派なるものがあるなかで、私はずつとイヌ派を自認して来たのだが、今はネコ派に傾いている。きっかけとなった出会いから数年経つが、記憶は鮮やかである。

八月末の暁闇を、喉を絞った鳥のような声が引き裂いた。音の出所はベランダに置いてあった空きプランターの中、掌に収まるほどの塊が身をよじって声をあげていた。産声のような強さで薄闇を脱ぐ子猫がそこにいた。

十日ほど前、居間のサッシ戸から、とある宅配便のロゴそのままの姿で、黒猫が自分と同じ色の塊を運ぶのを目撃したことがあった。あの赤ちゃん猫だと直感し、縁めいたものを感じながら小さなぬくもりを抱き上げた。

夏闇の声黒猫を象りぬ

闇に現れ闇に帰る野良猫の姿と、置き去り

にされた子猫の叫びを重ね、その折に作った俳句である。母猫はもどることなく、捨てられた否、託された子猫を育てることに決めた。人間の家族となるため、我が家の敷地で、もう一度産声をあげたのだから。

体重から生後二十日程度と推測され、八月六日生まれとし、ナツと命名、ミルクから育て始めた。子猫は野良の血が濃いためか、戸惑うほどにワイルドな振る舞いを見せた。膝に乘ろうにもジャンプできないものだから、半ズボンの私の脛をトルネードよろしく巻き登って、血の粒がいくつもできたが、風呂に浸かると沁みるその傷さえも、愛しく思えるのだった。

素早い動きのわりに鳴き声は控えめで、黒ずくめの姿態もそれらしく、くノ一（女忍者）のようなクール系美人。ツンデレの魅力か、明け方寝所に忍び込み一緒に寝てくれるものだから、愛は深まらずにいられない。小学生のころ「黒ネコのタンゴ」が流行ったが、言霊のように半世紀を経て実現したのだ。「キミはかわいい僕の黒ネコ」だけ時々爪を出して「僕の心をなやませる」と歌うままに……。

猫を観察していると、自分のやりたいことに真つ直ぐだけれど、うまく切り換えも利かせて、ストレスを和らげながら生きている。最良の同居人とたえることもあるそうだ。一方、熱く見つめる犬の瞳は魅力だが、こちらに余裕がないと、心の荷物として積もつてゆく辛さがある。最良の友たる犬と最後に死別してから十年が過ぎ、ライフスタイルにも変化が生まれていた。

自分のことをふり返ると、群れることは苦手だが、人間観察と動植物とのふれ合いが好きで、独り爪を研ぐように詩歌を紡ぎつづけることが性分に合っている。犬よりも猫的要素が多く備わっているのだった。休日の朝、早起きを催促する犬よりも、二度寝を共にする、猫との淡い共犯者のような親しみの方が、癒やしにはなりそうだ。猫だけに、夢の中で散歩するほかないという事情もあるが……。

夢と言えば、二年ほど前に鮮やかな散歩の夢を見たことがあった。かつて飼っていた犬が、なぜか黒いラブラドル・レトリバー犬になっていて、「よかった。おまえ、死んでなんかいなかったんだね」と声かけて、不思議

議な安堵と喜びに包まれて野中の道を歩む夢だった。犬はラブの血を少しひいてはいたが、毛色は金茶色のはずで、しばしいぶかしんだが、すぐに理由が分かった。いつの間にか黒猫ナツが寄り添って眠っていたからだ。

「おまえが夢に混ざっていたのか……」とつぶやいて、自分なりにこの夢を占ってみた。

「胸の中にいまも生きているのだから……この子を愛で包めばいいんだ」と。ネコ派を標榜しながら、分け隔てない愛の境地に着地できたようで、心が安らいだのを記憶している。

娘らが嫁ぎ、ナツ中心の、いわば猫ファーストな暮らしのなか、小さなドラマが毎日のように起こったが、思い出すだけでも胸が潰れるような事件が、昨年の夏起きてしまった。

タンスや本棚の上など、各部屋の最も高い場所を制覇し、ナツは遺憾なく天性のアスリートぶりを発揮した。寛容の心で、多少の悪戯も受け入れていたのだが、庭の草の匂いにひかれてか二、三度脱走されたのには困った。すぐ捕まえて胸を撫で下ろしたが、半ノ

ラ風の飼い方はするまいと心に決めて飼い始めた分、「外に行きたい」と切望する声は、いつも耳にせつなくひびいていた。

五、六年が経ち、若猫らしい無鉄砲さも影をひそめたかと、半ばさびしく思っていたときに、その事件は起こった。二階の網戸の縁を時々爪で搔くのを見たことがあったが、ついにその破れ目から屋根の上に飛び出したのだ。折悪しく雷雨迫りへの予報どおり、空模様があやしくなり始めたタイミングで……。

激しく呼ぶ母（妻）の声も耳に入らず、屋根伝いに遠ざかる後ろ姿。まもなくパラパラと来てどしや降りの雨が全てを包んだ。内弁慶にたちまち外猫の試練が襲う。濡れて光る屋根をずるずる滑り、雪止めに堰かれてうずくまる……。やがて雨が止み、ナツは濡れ鼠のまま、逃げた場所から無事部屋に帰還した。仕事から駆けつけた父が見たものは、母に拭いてもらって乾いたばかりの君だった。

こんなドキドキはもう懲り懲りだから、すぐにワイヤーネットと突っ張り棒を買ってきて、窓という窓にバリアを張る作業に取りかかった。ナツは、何事もなかったような顔で作業を熱心に見学し、それで降脱走を試みて

いない。

ガラスのあるところ、全てワイヤーで張り巡らせた古い民家こそ、こころ豊かに猫と過ごす私の砦である。

グリーン賞 ダイナミック

お散歩

秋田市 跡部 佐知

北東北は、わたしのお庭。

映画を一本観るために盛岡へ行ったり、イモリを探して東成瀬を歩いたり、盆踊りを観るただけに鹿角で一夜を明かしたりしてきた。

だから、秋田から盛岡くらいまでは、気軽に行けるお庭のような感覚がある。

わたしには福岡出身の友だちがいて、その子が秋田に帰ってくるときはどんな経路であろうと盛岡を経由するのを知っていたから、夏至のある日、盛岡駅でこっそり待ち伏せすることにした。

最寄り駅に迎えに行くならまだしも、盛岡駅だ。しかし、わたしにとっては、お庭に友だちが見えたから、靴を履いてドアを開けに行くのと同じことだった。

盛岡駅に着いたとき、空港のリムジンバスが来るまでまだ二時間ほどあった。わんこ

そばを食べて時間を潰そうと思つたのに、七十五杯のわんこそばを平らげてもまだ一時間も余裕がある。仕方なく、駅前のロータリーにあるベンチの、ちょうど柱の陰になっているところに隠れて、花巻空港からやつて来るバスを待つことにした。

その友だちとは、約束もしていないのに会うことが多かった。

大学や秋田駅、スーパーでばったり会うのはもちろん、仙台から出た新幹線でたまたま同じ車両に乗っていたことさえある。盛岡駅まで迎えに行く十日前にチャグチャグ馬コの行進を見に行つたときも、いまから福岡に帰るという友だちと盛岡駅で偶然会つたほどだ。

目を合わせ、なんでいるの？ とお互いほつぺたをつねり、夢じゃないことを確かめあつたあと、人目もはばからずにお腹を抱えて笑い合つたのが懐かしい。

チャグチャグ馬コの行進が盛岡駅に着く時間と、花巻空港行のバスが発車する時間は重なっている。友だちはわたしが東北の文化が好きなのを知っていたから、行進を見に行け

ば、と言ってくれたが、それよりも友だちを見送るほうを優先したかった。

わたしはもう、大学四年生。残された時間は短くて、脱皮したカゲロウやセミと変わらない、幾ばくかの余命を待つているだけ。チャグチャグ馬コはまた来年も見られるけれど、友だちを見送りできる機会は、いまだけしかない。

バス停にいた優しそうな方に頼み、出かけたときに持ち歩いているインスタントカメラで写真を一枚撮ってもらった。写真の中のわたしたちは、お揃いのポーズで、天然水を両手に抱えて、目を細めて笑っている。

いよいよバスがやってきて、友だちが乗り込むというときに、旅路の安全と充実を願ひ、わたしがお守りにしている忍び駒を手渡した。忍び駒とは、稲藁で編まれた馬を模した人形のこと、縁結びの効果があるらしい。北東北をお庭と呼ぶくらいだから、こうした民芸品にも目がない。揺れると鈴の音になる小さな駒を、友だちは大事そうに受け取った。バスに乗り込んだあと、窓越しに忍び駒を見せてくれた。

バスが発車して、建物の陰で見えなくなる

まですつと手を振り続けた。実家を離れる日に、送迎してくれた親の車が徐々に小さくなっていくのを、駅のホームからぼーっと見ていた四年前の春を思い出した。

腕時計に目をやると、大急ぎでチャグチャグ馬コ of 行進に向かつて駆け出した。行進にはなんとか間に合い、友だちにもその写真を送ったのを覚えている。

必ず盛岡を経由するとはいえ、約束をしていない人を待つのは落ち着かないことだ。バスではなくて電車で盛岡駅に来る可能性も否定しきれない。ベンチに座って友だちを待っている間、思い出の輪郭をなぞっていた。

昔は、思い出は数えられるものだと思っていたけれど、そうでないことがわかったのは友だちのおかげだと思う。夜空に瞬く星々を数えられないように、思い出も数えられないものだった。

この四年間、二人で色んなことをした。山で冒険したり、手料理を食べたり、映画を観たり、ピクニックしたり、かまくらを作ったり、家族みたいな思い出がたくさんある。喧嘩をしたことや、わかりあえないと思うよう

な出来事もいっぱいあった。

十五時を過ぎると、空港からやってきたリムジンバスの窓越しに、オフホワイトのシャツを着た友だちが見えた。バレないように後ろから、すみません、連絡先聴いてもいいですか？ とふざけた調子で声をかける。友だちは鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしていて、偶然会った十日前のときのようにいっしょに笑った。

駅蕎麦くらい奢る、と言い出した友だちに、もう蕎麦はこりごりだと告げて、博物館に行ったり、アーケードに行ったり、小川の石の上を跳ねたりして遊び、自分のお庭を案内しながら駄弁っていた。一人で盛岡をお散歩するよりもずっと楽しくて、流れる時間が早かった。

列車を使うダイナミックお散歩から帰るときは、いつも独り。

でもいまは、友だちがいる。赤いこまちで隣に座る君が、手のひらに忍び駒を返す。少しくたびれた様子の布や藁がほつれた忍び駒を見て、友だちらしいなと思った。

最優秀賞受賞のことば

空如美術館の実現を願いつつ

詩部門 高橋 岑 夫

鈴木空如は、清貧を厭わず、明治四十年から昭和七年まで二十六年間、法隆寺金堂壁画を模写。三作遺す。

はじめから模写を繰り返す計画はなかったと思われるが、金堂壁画は美術的にも宗教的にも深遠なもので、一回の模写では究めつかなかったであろうと言われている。模写の回を重ねるたびに線描の走りなど新しい発見があったことを壁画模本から推察される。

旧太田町では空如美術館建設のため基本設計まで至ったが実現できず、役場庁舎に隣接する文化プラザに作品を展示できるようにホールを改築、合わせて収蔵庫を新設。定期的な作品が展示されている。美術館を建設することができなかった悔いが深まるばかり。その気持ちを抱えながら作った詩が賞をいただき有難く思っている。いつの日か空如の故郷に美術館が実現されることを願っている。

魂の出会いから

短歌部門 鈴木 修 一

昨年度、教職最後の年に生徒たちと読んだ文章の一節、「彼女たちは、初めから犠牲者だったのではなかった。陽の光の下で生きていたのだ。今の私たちと同じように――」、これを受け、「被爆して逝きし少女のワンピースおしやれ心をひそと遺せる」と詠んだ。

酷い傷痕を残し、夢や未来までも戦争は奪い去ったのだ！その怒りや哀しみが選者の先生方の心に届き、受賞の栄えに浴することができたことをとても嬉しく思う。

「少女たちの『ヒロシマ』」の著者梯久美子氏は、やなせたかし『詩とメルヘン』編集部の一員で、『やなせたかしの生涯』を著わしている。「みんなの夢をまもる」というアンパンマンの使命が、戦争体験に根ざしていたと知り感銘を受けた。本と人を通し、魂が出会い、生まれる感動を核に、今後も創作に励みたい。

出会う

俳句部門 岸 部 吟 遊

自宅近くの小学校に大きな松が枝を傾けています。能代の砂防を推進した賀藤景林の植えた松です。海の方を見れば風の松原が広がっています。水田は常にかたわらにあり、四季折々の表情を見せています。しみじみと身に入むふるさとの原風景です。

そんな何でもない、あたりまえのように見ている光景は決してそうではないのではありませんか。そこには人々の暮らし、歴史や風土が重層的につながっているのではないか。ふるさとの自然にどっぷりつかり、詠み続け精進していきたい。俳句に出会い、生かされている事に感謝しています。

選をいただきました諸先生方、又俳句を愛する仲間の皆様に深く感謝と御礼を申し上げます。ありがとうございます。

ギョ、ギョ！

川柳部門 和田 仁

メンタル・クリニックのような選に、思わず驚嘆。

選者の斬新で寛大な知性感性に感嘆。

アキタの川柳界の革新性、対応力に衷心より敬意を表します。

既存から脱け、常に異質を昇華する錬磨を怠らない。

さすがです。

それでも私は書く

エッセイ部門 渡 辺 礼 司

「最優秀賞だ」というと妻は素直に喜んでくれた。だが「君の事を書いた」と言つたとたん、「もう、嫌だ」と言い放ち、離れて行つた。妻はなぜ、自分のことを書かれるとご機嫌斜めになるのか。理由がよく分からない。

十歳年上の妻はW座の劇団員時代、属するグループのリーダーだった。生真面目一直線の彼女が、能天気で腰の落ち着かない私に突然言い寄ってきた。驚きと勢いに飲み込まれて、つい一緒になつてしまった。もう五十年も前の事だ。

八十八歳になつた今も、彼女は新しい事に挑み、進化を続けている。私とて七十八歳の文章修行中の身の上、面白い題材が身近にあつて、書かないという手は無い。怖い目で睨まれても、それでも私は書き続ける。

選 評

小説・評論

風土と感性が交わる地点で

石 倉 葵

今回で五十八回目を迎えた「あきたの文芸」は、地域では歴史ある文芸賞として知られています。県内外から幅広く応募のある本賞ですが、何をもって「あきたの文芸」とするかは、これまでの受賞作の経緯や、選考委員それぞれの基準もあるかと思えます。私が重視したのは、まず小説として成立しているかどうか、次に趣意が明確に伝わるかどうか、そして自分にしか書けない内容を書いているかの三点でした。これらに加えて、秋田の地名や風景、秋田弁など、この土地ならではの風土や文化が感じられる作品には一点を加点しました。また県外からの応募があるこ

とも考慮し、秋田に限らずともどこかローカルティーを感じさせる作品にも同様に加点しています。

奨励賞を受賞した「海辺の補助輪」は、県外から秋田に進学した大学生が主人公です。両親の離婚を機に孤独を感じていた主人公にとって、祖母は家族であり、友人でもありました。祖母の死は居場所のなさ、帰る場所のなさを感じる大きな喪失であり、不安の種でもあります。そんな主人公が知らない土地で少しずつ暮らしに慣れていくなか、秋田の海沿いや駅の風景、秋口の冷たい風など随所に秋田らしい情景が描かれ、土地勘のある者にとっては鮮やかに風景が立ち上がる読み心地が好印象でした。選考委員のあいだで「この温泉は夕日が見えるのか」と議論になりました。モデルとなった温泉が思い当たった私は「ここの温泉は大きな窓があるんです」と他の選考委員の先生について解説してしまいましたが、本来であれば作品からその景色がきちんと分かる書き方が望ましかったですね。タイトルの「補助輪」にあたる人物描写はややご都合主義的と感じられる部分もあり、惜しくも最優秀賞には届きませんでした。全体

を通して心の傷や孤独を少しずつ乗り越えていく主人公の心の動きや人間関係の変化は共感を呼ぶものでした。

その他の作品も人物の魅力やエピソードの独自性、設定のリアリティやユニークさなど、評価できる部分やきらりと光るものはありませんでしたが、入選にはあと一歩及ばず、今年に奨励賞一作の選出にとどまりました。

「あきたの文芸」の選考委員を務めて今年で三年目になります。本賞は近年、若い世代からの投稿が減少している点が課題です。小説の規定は二万字以内。ジャンルという短編小説にあたります。限られた紙幅のなかで、読者に強く響く表現力や簡潔で効果的な構成が問われるこのジャンルは、難易度が高く、他ジャンルより投稿数が少ない傾向が続いてきました。そんななか、青少年（満十六歳〜満二十五歳）が対象のグリーン賞への応募は昨年よりやや増加し、全体として文章の質の底上げも感じられたことは歓迎すべき変化です。十一人もの作家が小説の執筆に挑戦することに、まずは心からの賛辞を贈りたいと思います。

一方で、近年は生成AIを用いた文章作成

も盛んに行われています。文章的な間違いや技巧の稚拙さは例年に比べて目に付きにくくなりましたし、作品としての論理性の欠如もアラが目立ちにくくなりました。本賞では生成AIを使用することは不可とされていますが、「正しい文章を書く」ことはすでに前提となった世界に私たちはいると実感しました。そのなかで、小説という形式でしか伝えられないことを描き、どんなメッセージを伝えようとしているのかがますます重要になっていますと感じています。奇をてらう必要はありません。むしろ自分の暮らす足元をしつかり見つめ、社会的なテーマと自分の身近な世界がつながるポイントを探すこと。そこから立ち上がる物語に耳を傾けることが、あなたが書くべきテーマを見つげる近道だと思います。

これからも「あきたの文芸」に多くの応募が集まり、ここでしか読めないユニークで力強い作品が育つことを心より願っています。地域の風土や文化を背景に新たな感性が開き、地方ならではの文芸活動がよりいっそう豊かに発展していくことを期待しています。

十一の作品から

尾崎 加奈

今年度の小説・評論部門への応募は十一作

品。昨年より応募数が増えたことに喜びを感じるとともに、その約半数をグリーン賞候補作が占めたことに驚きと頼もしさを感じました。どの応募作品からも作者お一人おひとりの創作への熱意がひしひしと伝わってきました。今年度の応募作は、主題の設定に工夫が見られ、意欲的な作品が多くありました。身近な人間関係を描いたものの、歴史に取材したファンタジーやノンフィクション、現代社会の闇に切り込んだフィクション、そして近未来を描いたSFなど。時代を反映した題材選びに、作者が様々なことにアンテナを張り、取材して創作に臨んだ姿勢がよく表れています。

さて、審査に当たり、私は次の三点を基準としました。一つには、作品のテーマや展開に独自性があり、読者を最後まで惹きつける魅力があること、二つ目として、人物造形や心情描写が豊かでテーマをより深く描くこと

に繋がっていること、最後に、作者が読者に伝えたいものがあること。これら三点をすべて成立させることは至難の業ですが、それを成し得たとき、作者は読者の心に響く何かを届けることができるのだと思います。

今年度の受賞作は、奨励賞の『海辺の補助輪』です。グリーン賞候補でもあった本作は、主人公の心情を豊かに描き、喪失、孤独、不安、嫌悪、憧憬、ためらい、期待など若者の心の機微を丁寧に捉えました。これは、選者三名が一致して評価した点です。特に、作者の描く秋田の情景と主人公の心情が絶妙に重なり合い、人物造形に深みをもたらしました。家庭、学校、祖母との外出先、海辺、温泉、車内、大学など多数の場面をちりばめ、両親、祖母、小中学校の友人、雪さん、大学の友人らとの関係から、主人公の心理を次々と描出していく作者の手腕は見事でした。そこにふと手に入れた「切り絵の女の子」。主人公の心にそつと寄り添うモチーフとして色彩豊かに描かれます。自分とは誰か、自分は何なのか、自分はどうかあるのか。そんな主人公の葛藤は、同時に、作者から読者へのメッセージでもあり、読者はこの

問いを「切り絵の女の子」という視覚的な印象で受け止めることでしよう。第二の主役である雪さんの人物造形がやや粗く感じられましたが、作品全体として読者を惹きつける力が十分に発揮されています。

今回、入賞には至らなかったものの、小説の芽吹きを感じさせる作品が多数ありました。高校生の部活動を描いた青春物語は、秋田の方言が豊かに遣われ、文化的地理的要素がちりばめられた魅力的な作品でした。特に、他者の呼び名を工夫することで主人公の他者に対する認識や関係性の薄さを表現したのは巧みでした。次に、AIと人間の共存を描いた作品は、人類がいずれ直面する衝撃的な問題を提示した意欲作でした。また、東南アジアからの留学生を現代の奴隷と見なす社会の闇を描いた作品は、日本のみならず国際的な社会問題を提起するもので、題材の切り口が斬新でした。他に、身近な兄弟姉妹や恋愛関係を丁寧に追った作品も複数見られました。不思議な穴から過去や現実を見えるという発想も興味深かったです。三国志に取材した作品はファンタジーのようなドラマがあり、情景が目には浮かぶような描写が見事でした。

手記から想を得た歴史作品は独創的で、登場人物の会話の続きが聴きたくなります。最後に、実体験から故事成語の意味や成り立ちを読み解く意欲的な作品もありました。皆さんの作品の種が、読者の手に渡ったときにどのように開花し、何を読者の心に残すのか、今後の創作に期待します。

審査を終えて

岡 英里奈

今年度から審査員の一人に加えていただきました。審査に当たってみて、改めて私自身が小説や評論を読む際に何を大切に行っているのか、どのような作品を好ましく思うのかを教えられた気がしております。

私が今回の審査の基準に置いたのは、まずは文章や構成の完成度です。それぞれの文や表現は、走り書きではなく推敲の重ねられたものになっているか、物語や論理の展開は、飛躍や破綻のない、説得力のあるものになっているかを重視しました。要するにそれは、単なる技術的な巧拙だけではなく、作者その

人が作品の最初の読者として、自作に対してどこまで鋭い眼を向けられているかということだと思っています。今回の応募作の中には、創作への意欲は十分に感じ取れるものの、残念ながらそのような読み手としての意識に欠けている作品がいくつかありました。

二つ目の基準は、作品そのものにその人でなければ書けないような独自性があるかどうかです。どこかで聞いたことのあるような言い回し、どこかで読んだことのあるような話は、おそらく今後AIが人間以上の完成度で量産していくように思います。そのような類型的な表現をいかに避け、登場人物が立つ空間一つ、セリフ一つに、どこまでの具体性、個性性を付与できるかが、人間の力の見せ所だと思います。

奨励賞を受賞した「海辺の補助輪」は、上記の二つの基準を高いレベルで満たすものでした。とりわけ、主人公が抱える「心の穴」の内実や進学後の秋田での生活、救いを求めて訪れた海岸や岩城みなと駅近辺の描写など、細部の書き込みの密度が物語にリアリティとオリジナリティを与えていたように思います。登場する地名が、単なる記号では

なく〈生きられた場所〉として描かれているという印象を受けました。また、「急に心の穴が大きくなって」や「化粧水をつけたあとほつぺたのように」といった何気ない表現にも、書き手の身体性、血肉から湧き出てきた言葉としての力を感じ取ることができました。

一方で、そのような「私」をめぐる叙述の緻密さと比較すると、もう一人の主要人物である「雪」の書き込みの甘さが気になりました。例えば彼女は「私」に向かって「（海へは）バランスを取りに来る」、「母親の愚痴って私の否定なんだよね」といった言葉を発しますが、そうした言葉そのものは非常に魅力的であるものの、彼女がなぜそれらを会って間もない「私」に語るのか、彼女は一体どんな人物なのか十分に説明されないため、結果としてその存在がどこか観念的で、作者や「私」にとつて都合のよいものに感じられてしまいました。ラストの「私」と雪の別れのあつけなさについても、雪の人物像次第で読後感が変わってくるように思います。

その他の応募作では、「淳子さん」、「わをん」が特に印象に残りました。「淳子さ

ん」は昭和六〇年代の秋田を舞台にした若者のラブストーリーで、主人公の働くデパートの様子や男鹿街道沿いの寂れた食堂といったディテールと、篠田節子や林真理子を思い起こすようなどこか飄々とした文体に魅力を感じました。「わをん」は県内の吹奏楽部に所属する「わたし」の日常を描いた物語ですが、吹奏楽部の面々や顧問の先生、秋田弁を話す用務員さんといったそれぞれの登場人物が魅力的に描かれており、また冬の学校という空間の描写にも優れたところがありました。ところどころに文章の粗さや構成の甘さがあり、受賞には至りませんでした。それぞれに独自の世界観がありました。次回作に期待したいと思います。

詩



言葉を大事に

保坂英世

角田光代の町田康に対する書評を読んでいた。次のような文章にたどりついた。『言葉を「使う」と書く世界が狭まる。いつだって世界は言葉以上なのだ。私たちの持ち得るちつぽけな言葉を用いて描こうとすれば、どうしてもそれは言葉以下のちつこい世界になつてしまう』

この文章は小説の書評であるが、これは詩でもまったく同様だなと思った。作品を書くためには言葉との出会いが必要になるのだが、出会うとは言葉の種類と作用を知るということである。散文は多くの人に伝わるように書くのだが、さいわい詩は個人の感じたものを保とうとするので少しは自由度があるのかもしれない。詩の場合は主題に迫る視線の深度や角度、使用する言葉等には個人の匂い

がたちこめる。本来言葉は多義的なものである。だからこの多義性を巧みに使うことで表現の魅力を広げることが出来るだろう。さて今回はみなさんのどのような言葉に出会えるだろうか。

今回の応募作品は三十三篇で昨年より八篇の増、最近減少傾向だったのでうれしい。各作品からは伝えたいことがヒシヒシと感じられ、戦争に関連する箇所のある作品も多かった。しかしその訴える力も、構成や言葉遣いによつて作品としての差がついてくる。残念ながら吟味の足りない作品も目についた。

このたび私がまず注目したのは『空如―声なきものに筆を向けて』である。法隆寺金堂壁画を模写したことで世に知られる仏画師の鈴木空如をテーマとし、完成度の高い凛とした文体で表現している。「そして紙の上に仏は戻ってきた」の締めくくりもいい。次に注目したのが『月見草の花言葉は』で、誰しもが抱く現代の矛盾がテーマ。歯切れのいい文体で、リズムが心地よい。最後の「ミサイルの穴の切岸で／ようやく晴れた青空を／目指して花は咲くだろう」からも鮮やかな映像が伝わってくる。選考委員の間でも両作品の評

価が高く、前者が最優秀賞、後者が奨励賞に早々に決まった。

もう一つの奨励賞『Parallel (パラレル)』からはさわやかさとポエジーが感じられる。各部分を細かく見ると別の書き方があるかもしれないが、そこら辺はこれからの勉強次第。可能性が感じられ今後を期待する。

入選の『夏ズイセン』は母への思いを表現した詩。テーマと花のつながりで読ませるところが成功した。ただし言葉の吟味は今一つ。全体に無駄な言葉が多いので、省くことに留意してほしい。例えば「夏ズイセンである」の「である」、「生まれたらしい」「朝らしい」の「らしい」は必要なのか？ また「夏ズイセン」「ナツズイセン」「夏水仙」のどれが一番読者に訴えるのか吟味したのだろうか、といったところ。もう一つの入選『ある試験の日』。遠い昔の試験前の気持ちを思い出した。この作品からは光と色を感じた。それを意識したかどうかは分からないが、読者に多くを感じさせれば良い作品になる。

他の作品で目にとまったのは『うつたあくび』、何げない日常がよく描かれている。

言葉が多すぎたかな。『青柳緑子先生のこと』、『五年日記』、『絵踏のむこうに』など。

グリーン賞の『この空白を埋めて』、身近に経験したことを書くわけではないので少し観念的にならざるを得ないでしょう。「家族写真の数g」等の工夫も見える。『失望の海』、私も昔こんな詩を書いたような。若かったなとは思っけれど。

たくさん作品を読ませていただき、ありがとうございました。

*秋田県現代詩人協会会員、詩誌「日本海詩人」同人



詩作の継続を

前田 勉

今年の応募総数は三十三編。昨年に比べて八編増で、数年ぶりに三十編を超えた。年代別では十代が最多の十二名。これまたうれしいことであつたが、三十代と四十代の応募がなかったことは残念であつた。

委員三名による選考の結果、最優秀賞一編、奨励賞二編、入選二編、グリーン賞二編となった。

・最優秀賞「空如―声なきものに筆を向け
て」

静的な時間と緊迫した情景を織り込んだ作品である。法隆寺金堂の壁画を模写したことで知られる鈴木空如は、大仙市太田町出身。この先人の精神に近づきながら模写する様を、選んだ最小限の言葉で活写している。やや精神的な色合いが強い感もするが、だからこそ静的な描写がここに活きているともいえる。「形にならぬものの静けさ／火の前にすでに仏は筆にうつっていた」「そして紙の上に仏は戻ってきた」と書く後半は、一九四九年、法隆寺金堂が失火にあったことを指しており、深みのある表現となった。

・奨励賞「月見草の花言葉は」

第一連からインパクトのある言葉が続く。

「真夜中のハンマー」とは、今年六月にアメリカがイランの核関連施設に対して行った際の作戦名。そのことを知ればこの作品のモチーフと情景は見えてくる。「互いに勝利を宣言し／次のステージが／始まっただけだった」という現実とは、「どんなに時代が変わっても／諍いの心は利己的で／取扱い説明書を読まずに／すべてを壊して」きた負の歴史でもある。終連に望みを残している。

・奨励賞「Parallel (パラレル)」

扉を境にして未知の世界と現実の世界を位置づけ、揺れ動く自身のあり方を問う。素直な書き方に好感。「行きたい」「生きたい」「いきたい」とする心情表現も、「と叫ぶ私の心」が本物か作り物の何かなのかと問う次行にかかっていることでうまく作用している。

・入選「夏ズイセン」

戦後八十年の今夏も夏ズイセンが咲いた。植えた（かもしれない）ことを語ることなく他界した母の思いへ寄り添いながら、この花と自身のつながりを表出。作者の心情がじわりと伝わってくるが、全体的にやや散文的で説明しすぎた感が残る。

・入選「ある試験の日」

実にリズムカルだ。元素番号の一から二〇までを暗記する語呂合わせを繰り返しながら、バスに乗って登校する。バスから見える情景表現もイキイキとしている。「今だけの

効力を持った魔法」を持つている「僕」の姿が素敵だ。

・グリーン賞「この空白を埋めて」

戦争とその惨禍を現実として知らない「僕たち」。そのことをストレートに表してゆく。そして終連、「この呟きだつて（略）妄想でしかないというのに」と書く。それは「僕たち」だけでなく、読む人もまたそうなのだという思いを湧き出させてくれる。

・グリーン賞「失望の海」

具体性がなく観念的ではあるが、今の自分を直視し表出しようとする姿勢に好感。第一連一行目の敬体と読点打ちが特徴的で、この一行が冷静さを伝える効果にもなっている。

入賞作品以外で注目したのは、「絵踏のむこうに」「五年日記」「母達の念い」「うつたあくび」「盆の朝虹」などであった。

選を担当して三年、多くの感性とその作品に出会うことができた嬉しい期間であった。皆さんが今後とも意欲的に詩を書き続けることを切に願ひ、選評とする。

詩誌「密造者」「海市」各同人。県現代

詩人協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブ各会員。秋田市。

詩界の沼から

堀江 沙オリ

俳句や短歌がこれだけ隆盛の時代、沢山の詩の応募が嬉しい。詩は縛りが無いだけに何をどう描き自分を投影するかが難しいかもしれないが、魅入られれば沼にはまる。どう広げ、どう絞るかの作業も案外楽しい。

全作品の中には面白い試みもあったが日本語として不十分だったり、散文や論文や童話や歌詞ならと思う作品もあった。その中で受賞作品は紛れもなく「詩」だった。惜しい作品も多かった。だから選外でも落ち込まず、心と感性のアンテナを立て、何度も推敲し、書き続けてほしい。

若い人の作品からは、不安や希望、自虐、自分とはという哲学や、大切な存在、日常が生き生きと立ち上がって見えた。読書やネットから吸収した現代の姿や、熟達を感じた異色作もあった。若い人は詩の書き方をよく知

っている。詩を愛する教育者がいるとしたらそれもまた嬉しい。今が不安で、未来は掴みどころなく、感受性に整理がつけられなかったり、生活の変化で詩から遠ざかるかもしれないが、いつかまた詩と再会したなら今回書いた詩の心を忘れずに人生の中で表現をし続けてほしいと切に願う。

人生を経たと思われる人の作品には私の知らない時代も描かれ興味を覚え、また戦後八十年に関する詩も多かった。身近な生活や家族への思いも多数綴られていた。人生の一部分を切り取ることに關しては、体験した事柄や年月は強みにもなれば、逆にそこに寄りかかってしまう弱みにもなる。思いが表現に勝ってしまう危うさは、体験の重さとのバランスで回避できると思う。とにかく詩と向き合って、書き続けてほしい。何歳になっても新しい気づきがあり、感性は更新できるのだから。

最優秀賞「空如―声なきものに筆を向けて」書き慣れた人の、書き続けたからこそ作品。法隆寺金堂壁画を模写した仏画家である鈴木空如が作者に憑依したかのごとく、冒頭から作品世界に引き込まれる。推敲を重ね

ねた無駄の無さ、言葉の技術、独自性、構成力も高度。完成度が高い詩である。空如や壁画の知識が無くても優れた詩だが、解しにくい箇所も。

奨励賞「月見草の花言葉は」書き慣れた人の作品。社会性のある詩はともすれば思想が言葉を越えてしまいがちだがこの作品はそうではない。構成、暗喩、最終連への流れと帰結も巧み。問題意識を持ち書き続ける姿勢を見倣いたい。やや観念的な箇所と助詞の用い方に一考を。

「Parallel」若い感性が本気で想像し、創造した。パラルワールドと現実の対比も自然で気負いが無い。やさしい言葉で作品世界を伝えるのは実はとても高度で、難しいことなのにこの詩はそれをやってのけた。すごい。

入選「夏ズイセン」過去と家族を美化せず客観的に詩として表現できるまで、どれだけの葛藤と書く上で修練があつたろうか。終連のまとめ方に至る構成力も見事だ。少しの言葉の整理を。

「ある試験の日」時間と場所とバスの中の情景、心情、元素記号の暗記の精度の表現

に読み手は作者と同化していく。二連などの表現力、言葉のリズムも「うまい」としか言えない。試験結果をきいてみたい。

グリーン賞 「この空白を埋めて」 読み

手自身につきつけられた現代の命題に圧倒される。各連の最終行的確さも優れている。

真摯に問題意識を持つ若い人の姿勢、想像した痛みへの独自表現も良い。細部の言葉の用い方に一考を。

「失望の海」 ひりひりと痛い。かつて同様の辛さの中にいた私は、辛さを詩に出来なかった。理想と現実の落差を突きつけられ、周囲や社会の矛盾に気付く感性は自身にも容赦が無い。でも生きて、生きてほしい。そして書いてほしい。少しでも言葉を整理すればもっと伝わる。

（「北五星」「左庭」所属）

短歌



終戦八十年

古澤 りつ子

太平洋戦争が終戦して八十年が経った今年は、戦争と平和についての作品が多かった。そのなかでも「終戦八十年」は、原爆をテーマとして書かれており、自分や家族の戦争体験をテーマにした他の四作品とは趣が異なっていた。

かさぶたを剥ぐ心地せん黙し来てついに戦争を語らん人は
被爆して逝きし少女のワンピースおしゃれ心をひそと遣せる
放たれし鳩は自ずと群れ立ちて原爆の来し空を埋めゆく

一首目、被爆者の語り部が、戦争を語っている場面。「かさぶたを剥ぐ心地せん」に注目した。心に封印してきた傷跡を、一気にさらけ出した様子がよく表現されている。二首

目、原爆資料館での被爆者の遺品だろうか。「ワンピースのおしゃれ心」が具体的に、痛々しい。一般市民である幼い少女も巻き込まれた戦争の悲惨さがよく伝わる。三首目、「原爆の来し空を埋めゆく」に平和への願いが込められている。全体的に力まず、率直に平和の大切さを訴えている。

「母への手紙」

母への挽歌が切々と、わかりやすい平易な言葉で紡がれている。しみじみと悲しみが伝わる作品である。

面会の出来ぬコロナ禍わが書きし母への手紙百通を超ゆ

亡き母が日日使ひたる手鏡のくもり拭へばあふるる光

母逝きて残れる古き和筆筒の樟脳の香は過去世のごとし

一首目、コロナ禍の頃は面会が制限され、入院している人、見舞う人のどちらにも辛い時期だった。「母への手紙百通を超ゆ」に親子の情愛を感じた。手紙ならば、何度でも読み返すことが出来るし、どんなにか励まされたことだろう。二首目、「くもり拭へばあふるる光」に心惹かれた。亡き母を偲びなが

ら、手鏡のくもりを拭っている行為が具体的で、作者の心情もそこに溢れている。三首目、「過去世のごとし」は、親子の縁は過去世からずっと続いている、深い絆と思い至った作者の感慨がある。樟脳の香がそれを思い出させてくれた。母親を亡くした喪失感はずつ埋められていくのだろう。

「ルソンの父は」

戦後八十年がテーマの作品。父が闘った戦場であり、戦死した場所、ルソン島を訪ねた連作だ。

この世にて一度も会うことかなわざり山に向かいて「父さん」と呼ぶ

涙してルソンの山を巡りし日のあの暑き夏忘るることなし

この星に戦の絶えぬ現世^{うつしよ}を嘆きていんかルソンの父は

一首目、二首目、作者は一度も会うことかなわざる、父親を恋う歌が続く。激戦地であったルソンを慰霊のために訪ねたが、もしかして、遺骨も見つかっていないのかもしれない。ルソン島の山に向かって「父さん」と呼ぶ声は心揺さぶる。三首目、平和を願う父の気持ちには、そのまま作者の気持ちでもある。

今も戦争の絶えない世の中を嘆いている。

「合掌」

一連の作品は、作者の敬虔な信仰心に裏付けされている、一心に道を求める姿に心惹かれた。

仁王門潜れば伽藍目の前に鮮やかなりし苔

石を行く

我足りぬ事問う為に訪ねれば仏像は黙し

じつと目を見つ

チョロチョロと手水場に落つ真清水の飛沫に遊ぶうわばみ草は

一首目、参拝に訪れたお寺の様子が良くわかる。「鮮やかなりし苔石を行く」は現在形にして、「鮮やかな苔の石の道行く」くらいにしたらいかがだろうか。二首目、祈る作者とそれを見つめる仏様の慈悲のまなざしの温かさが感じられる。「じつと目を見つ」としているが、「われの目を見る」くらいがすつきりしている。三首目、うわばみ草は山菜のミズのこと。「飛沫に遊ぶ」で、手水場から流れ出る清水を受けて、生き生きと成長している様子がよく表されている。

その他に注目した作品について述べておく。

「父の背」

五ページに落とされた染み許そうか父が私を許したように

チョコパフェを食べ終えるまで童心のひげの無精をただ見つめおり

「ユー・エン・ミー」

深緑と花蹴散らしてぼくたちは共犯者だと指差されたい

わたしたちは天秤の向こう岸にいる そういうふうに今も生きている

グリーン賞

「雪の感触」

結晶が震えた手へと舞い落ちて初めて知ったその暖かさ

新雪に残る足跡交差してどこかに見える人の営み

七首の連作としてのテーマがはつきりとしており、何よりも五七七七七の定型を守っていて韻律が整っている。読んでいて気持ちが良い。ただ、全て三句切れになっているので、連作としては単調になってしまっている。これからの活躍が期待できそうだ。

短歌結社「白路」同人。現代歌人協会会員。

秋田県歌人懇話会副会長。歌集『魔法の言葉』



選を終えて

加藤 トシ子

・応募原稿を拝見して、非常に残念に思ったのは、原稿の書き方が粗末な人が少なくないということでした。誤字・脱字・新旧仮名遣いの混交、原稿用紙の書き方の間違い等が、少なくないという事です。

「秋田の文芸」は県主催のレベルの高い大事な文芸集です。お互いに気をつけましょう。

○最優秀賞「終戦八十年」

- ・被爆して逝きし少女のワンピースおしゃれ心をひそと遺せる
- ・放たれし鳩は自ずと群れ立ちて原爆の来し空を埋めゆく
- ・被爆して逝った少女のおしゃれ心。遺されたワンピースに、一度でも袖を通した事があったのだろうか。原爆がなかったら、戦争が

なかったら、最もおしゃれをしたい年ごろだったのに。単に「切ない」では、すまされない。こんな少女がいっぱいいっぱい居ただ。

○奨励賞「母への手紙」

- ・施設にて暮らせる母の日常をいつもカメラにのぞいていた
- ・微笑みを浮かぶるさまに見えながら母はうつつのまなをとじる

・「いつもカメラにのぞいていた」「母への手紙百通を超ゆ」「母はうつつのまなをとじる」と、施設にいる母を思う娘の思いがあふれている。言葉の使い方が上手い。

○奨励賞「ルソンの父は」

- ・この世にて一度も会うことかなわざり山に向かい「父さん」と呼ぶ
- ・一度も会う事が叶わなかった父への思い。叶わなかった故に、秘かに「父さん」と呼ぶ思いは深い。

○奨励賞「台掌」

- ・我足りぬ事問う為に訪ねれば仏像は黙しじつと目を見つ
- ・我肥やす術求め来て山門を潜れば釈迦像大きく見下ろす

・「我足りぬ事問う為に」「我肥やす術求め来て」と、求道の思いが深い作者。そんな作者に「黙し」「じつと目を見つ」「大きく見下ろす」のみの仏像。

○入選「友」

- ・今年またこれが最後と来る賀状律気な友の老いを笑えず
- ・「これが最後」「これが最後」と来る賀状が確かにありますね。作者も「老いを笑えず」と表現したように、ある程度の年齢に達しないと分からない事なんです。

○入選「父の背」

- ・不自由なお尻を幾度取り替えて私は誰のために泣いてる
- ・「私は誰のために泣いてる」「父の背は鉄より寂し」等の魅力的な表現は、秀逸。

○入選「猛暑日つれづれ」

- ・来世など未経験ゆえさておいて猛暑に耐えて今日を生き切る
- ・「来世など未経験ゆえ」「今日を生き切る」など、説得力があります。

○入賞「家」

- ・リフォームを繰り返しつつ七十年昭和染み入るこの家に住む

・過ぎ去ったものは、みな懐かしい。愛着
七十年の家に、住み続けることもまた幸せ。

○入選「ユー・エン・ミー」

・深緑と花蹴散らしてぼくたちは共犯者だと
指差されたい

・共犯者と言われる事も、また嬉しい僕達。

○グリーン賞「雪の感触」

・さわれない線で結ばる星たちと僕らの心は
どこか似ていて

・恋人の自分たちを星に例え、新鮮で楽しい
作品。

・『かりん』同人・「かりん秋田」・飯田川
短歌会・秋田県歌人懇話会理事・日本歌人ク
ラブ会員・第一歌集『いちまいの葉つば』

・第二歌集『にまいめの葉つば』



選を終えて

熊谷 すが子

「終戦八十年」

古き記事見返す間なく膨れゆく戦後八十年

のスクラップ帳

かさぶたを剥ぐ心地せん黙し来てついに戦
争を語らん人は

相愛のひかり珠とし灯しおく胸に抱きしか
夫の戦死を

戦後八十年が過ぎ、体験を語り継ぐ人も少
なくなつて日々色褪せてゆく戦争。その悲し
みや苦悩を俯瞰した目で詠っている反戦歌と
も言える。「かさぶたを剥ぐ心地に戦争を語
り始める」という表現に心情が凝縮されてい
る。

「母への手紙」

面会の出来ぬコロナ禍わが書きし母への手
紙百通を超ゆ

亡き母が日日使ひたる手鏡のくもり拭へば
あふるる光

母逝ぎて残れる古き和筆筒の樟脳の香は過
去世のごとし

過不足のない整った七首。「手紙百通」

「手鏡のくもり」「和筆筒の樟脳の香」など
の具体が歌に生気を与えている。亡き母への
追悼歌として母を恋う深い思いが伝わってく
る。

「ルソンの父は」

終戦ゆ八十年過ぎしこの夏はルソンの父を
しきりに想う

戦争の悲惨さ酷さを伝えんと壇上に立つ遺
児なる吾は

戦争遺児の作者が思いのままを素直に詠つ
て心情が迸る。戦争に翻弄された人々の苦悩
と平和への希求を当事者として語り継ぐ活動
は重く尊い。そんな思いを伝える手段として
の短歌の持つ力に強く胸打たれた。

「友」

今年またこれが最後と来る賀状律気な友の
老いを笑えず

「呼び出しの声で君だと判ったよ」わが腕
掴む友は白杖

アルバムに重なりあつて早や傘寿君は十五
の頑是なきまま

そこはかとないうもアが傘寿を感じさせ
ない若々しさを醸し出し、しみじみとした友
情が伝わってくる。定型の中に会話や事象が
自在に詠われていて調べが良く、読んでいて
心地良い。結句が特に効果的で余韻が残る。

「猛暑日つれづれ」

猛暑日は山家に籠りパソコンで歌や詩を書
きエッセイ綴る

文字並べ指折り数え推敲し脳かき回しことばで遊ぶ

初めての詩が地元紙に拾われて泥鰌さがしの投稿づく

昔は晴耕雨読であつたが、今は異常気象の猛暑から逃れる日々となつてしまった。

「脳かき回し」や「泥鰌さがし」など諧謔的な言い回しが印象的だが、凡俗と諸刃の剣の危うさもあるかと。奔放な日常が素直に詠われていて、飄々とした作者が目に見えかぶ。

「家」

リフォームを繰り返しつつ七十年昭和染み入るこの家に住む

子の夢に縛りかけまじ時折に帰省すること喜びとせん

代替りして繋がっていく家の様子を淡々と詠っている。昭和を生きてきた夫婦が、子供の夢と継承されない「家」の狭間で揺れる諦念と寂寥の心情がしみじみと伝わる。

「秋に傾く」

角を曲がり子は去り行けりそれまでを振り合いし手に降りる静けさ

三分を計り終えたる水時計はからぬ時間を
まといて佇む

「手に降りる静けさ」や「時間をまといて」の表現に巧みな工夫が感じられる。

「梅雨明け」

自分らしく生きるとはなに梅雨が来る前に縮毛矯正をする

嘘をつくわけじゃないけど本当のことは言わない水色の傘

繊細な若さが奇を衒わずに表現されている。

俳句

選評



佐藤 茂樹

三回目の選評、改めて自分自身が俳句を学ぶ機会をいただき、深謝致します。

○最優秀賞

「豊饒」

海山のあはひの棚田耕せり

田の中に代々の暮稲穂波

出羽富士は雲を豊かに今年米

故郷の稲作文化と豊かな実りを四季を通して謳い上げ、その中に自然や先祖への崇敬、踊、帰省、新米、新酒等を点描。

○奨励賞

「仁王尊」

筋骨の締まる仁王や寒の寺

皺深き仁王の眉間大寒波

一題に七句を厳しく統率。しかも、筋骨に寒、皺に寒波、雷鳴と力瘤等、仁王とその他

の事象の間には剃刀一枚の隙間もない。

「村の未来図」

門火焚く下駄の音なら父であり

盆三日棄田の草に立ち止まる

盆の月村の未来図探しおり

人や店舗のなくなつた地域でも、門火の習慣は続けられ、耕作放棄地を眺めつつ、将来の村の未来図を描いている明日への光明。

「掛唄」

葺き替えの奥宮光る豊の秋

掛唄の朝霧晴れて勝名乗り

最初に奥宮、幟、荒格子等、物理的な描写をしつつ、少女の眉、朝霧等あたかも一眼レフの交換レンズのごとく自在な視覚を展開。

○入選

「浜の村」

沖暗し吹雪まみれの登校児

百万遍の鉦の音凍つる浜の村

出稼ぎの父の文読む寒夜かな

厳寒の浜の村を描写。家屋を囲む風除け、登校児、鉦の音等、情景は勿論、行間から音さえも流れ出てきて臨場感がある。

「全校登山」

しんがりをつとめ全校登山かな

父と子の教師の道や茄子の花

親子二代の教師。しんがりを務めたのは亡き夫か、次の句で子供さんも同じ道を選ばれたことを知らせる。親子二世代の境涯句。

「弥勒菩薩」

轉のこゑのみ今朝の弥勒佛

弥勒菩薩月の光に濡れ今宵

主題である弥勒菩薩を、四季を通じてバランス良く表現。月光等の取合せが詩情豊か。

「萬固山にて」

御霊屋の赤き唐破風緑さす

白亜なる仏舍利塔や蟬しぐれ

登山の状況を大樹、夏燕、唐破風、山門、蟬しぐれ等、多角的な視点で表現。

「母逝く日」

あたたかやささいなことも褒めし母

花の昼車椅子より母立たす

更衣母の好みを揃へけり

何でも褒める母の比類なき優しさを思い出し、次は車椅子より立たせて母を自分が褒める場面、更には更衣等、やさしい日常をかけがえないものとして思い出し出している。

「余生」

あらためて帰郷のこちち駅風鈴

葉得てその数多し盆用意

駅の風鈴に帰郷の日を思い出し、西日が貰く家、日常の葉の準備や盆用意など、二人のかけがえない穏やか日々。

「雪国に住む」

誰も来ず何処にも行かず四日かな

猛吹雪裂きてピンクのこまち号

子供さんの家族も去り、四日からは又、静寂を取り戻す。最後の句はこまち号を活写。

「いにしへ」

ことのほか小さき土偶や青葉木菟

この石はかつて鎌か月冴ゆる

古代の人々の生活を思う時、悠久の月がマツチ。マクロや望遠など視覚も多彩。

○グリーン賞

「秋田の秋」

盆休み俺は「帰る」で君は「行く」

新鮮で斬新な表現。俳句的な素養が加わっても、独自の素材と表現を堅持してほしい。

俳人協会秋田県支部副支部長兼事務局長
香雨同人 同矢羽句会会員



選評

泉屋 おさむ

入選された作品と惜しくも入選を逃した作品とは本当に僅かの差であった。芭蕉は「句調（くとのわ）ずんば舌頭千転せよ」といったそうです。一句の調子が悪いときは何度も口ずさんで直しなさいとの教えと理解している。俳句は十七音しかない最も短い形の詩です。一字の助詞の選択によって俳句の出来に違いが出てしまいます。

前回同様、選句は自身の俳句の創作につながることを思い、応募された作品の一句一句に向き合い選をさせていただいた。

最優秀賞 「豊饒」

海山のあはひの棚田耕せり

稲の花一重験の赤ん坊

出羽富士は雲を豊かに今年来

七句とも調べが良く、しかも句意が素直に読む者の心に届いてくる。「一重験の赤ん坊」は、天地の庇護を受け成長していく早苗を思わせる。豊かな雲を浮かべた秀麗な出羽

富士は、今年の豊饒を約束してくれている。

奨励賞 「仁王尊」

皺深き仁王の眉間大寒波

春風や忿怒緩めぬ仁王尊

雷鳴や昂る仁王の力瘤

仁王像は、仏教寺院の門の前に立ち、仏法を守る役目を担う守護神といわれる。右側が阿形。左側が吽形。「仏教の阿吽の呼吸」の考え方に由来し、「始まりと終わり」を意味し、宇宙の調和や生命の流れを表しているという。この俳句、七句とも季語と季語以外の措辞との調和が見事である。

奨励賞 「村の未来図」

門火焚く下駄の音なら父であり

盆三日棄田の草に立ち止まる

盆の月村の未来図探しおり

「限界集落」ということが提唱されて久しい。この俳句の作者にしても、ただ手をこまねいて村の衰退を待っているわけではない。「村の未来図」というからには作者には村再生のビジョンがあるのではないか。そんな希望を抱かせてくれる作品である。亡き父も後押ししてくれている。

奨励賞 「掛唄」

葺き替えの奥宮光る豊の秋

老杉の奥の掛唄霧襖

掛唄の露結ぶ間も聞き合ひ

六郷（美郷町）の掛唄大会であろうか。荷方節に乗せて二人の唄い手が句の話題を取り込み、当意即妙な掛け合いを演じている様子や、それを取り巻く神社の境内の情景がリアルに伝わってくる。掛唄一本に絞り込んだ意欲作である。

入選 「浜の村」

百万遍の鉦の音凍つる浜の村

入選 「全校登山」

魂迎へ相談ごとの二つほど

入選 「弥勒菩薩」

半跏坐の弥勒菩薩の清らかな

入選 「萬固山にて」

御霊屋の赤き唐破風緑さす

入選 「母逝く日」

握る手に温み移さむ冬来たる

入選 「余生」

あらためて帰郷のここち駅風鈴

入選 「雪国に住む」

猛吹雪裂きてピンクのこまち号

入選 「いにしへ」

木の実落つ豎穴住居跡の穴

グリーン賞「秋田の秋」

じいちゃんの節くれた手に赤とんぼ

子と共に品種改良精霊馬

独自の視点と素直な表現に魅力を感じた。

ぜひ俳句を作り続け、作ったら推敲を心掛けるようにして欲しい。



選考寸感

加藤 昭 子

今年度は六十八名、四百七十六句の出会いがありました。一句一句の背景、作者の思いを取り込みながら選考に当たりました。有季定型、季語の幹旋、発見、句意が伝わりやすいか。又、原稿の書き方、誤字、脱字、文字を直した後の処理など、最少の心配りが必要ではないかと感じた選考でした。

最優秀賞「豊饒」

秋田の豊かな風土性が、一句一句に感じられた句群である。題名の付け方にも、住み慣

れた土地への愛着が感じられ好感。

稲の花一重臉の赤ん坊

稲の花の甘い匂いと、丸々と肥えた赤ん坊

の取り合わせが良い。

田の中に代々の墓稲穂波

秋田では良く見掛ける風景。代々からの土地を大切に守り、豊かな稲田の広がり誇りと感じさせる。

田の神へ産土神へ新走

収穫の有り難さが表出されている。稲刈りを

を終えた喜びと感謝の念。

奨励賞「仁王尊」

全句、名詞止め。格調高く、手堅い句の形に仁王尊の姿が見えて来る。

筋骨の締まる仁王や寒の寺

季語の据え方で、仁王像の姿が厳格に、より締まった体型として迫る。

皺深き仁王の眉間大寒波

仁王尊の彫り深い形相は、大寒波をものともせぬ威厳があり、そこに暮らす人々を守ってくれているという思いが見える。

奨励賞「村の未来図」

平凡な日常の営み、秋田県ならではの現状を愁う。柔らかな言葉の隙間に哀感を見る。

草の市スーパ一の無い村に棲む

家族が集まる盆、草の市で品物を買いな

ら思う村の将来。下五の漢字の据え方に、あきらめと、このままこの地で暮らして行くという気概が重なつて見える。

パブリカに近づく村の隙間かな

パブリカの赤・黄色の明るい畑に佇つ。老いて行く村の田畑を眺め、にぎやかだった頃に思いを馳せる作者が見える。

奨励賞「掛唄」

歴史ある行事、掛唄に対する愛着が見える句群である。

陣立のごと幟立つ秋祭り

掛唄会場に立つ幟の多さ、伝統を守る人々の気負いの数であろう。

掛唄に挑む少女の眉清し

若者に引き継がれて行く掛唄、見守る作者の目差しが暖かい。

入選より一句ずつ引く

百万遍の鉦の音凍つる浜の村
海辺の暮らし、一昔前の風景を思い出している作者。

しんがりをつとめ全校登山かな

生徒達を見守る目差し、事故なく終わるよ

うにと祈りながら登って行く。
弥勒佛へ一筋のみち冬ぬくし

堂に続く雪の道、信仰の道も足跡も一筋。

床下をぬける涼風萬固山

堂の床下を風が吹き抜ける。心も身体もほぐれて行くひととき。涼しさが伝わる。

あたたかやささいなことも褒めし母

長生の母に対する思い。いつまでも残る思慕が胸を打つ。

あらためて帰郷のこちち 駒風鈴

ふるさとの駅に降りて聴く風鈴の音。ノスタルジーを感じる。

猛吹雪裂きてピンクのこまち号

秋田ならではの。こまち号の鮮やかさ。

木の実落つ 竪穴住居跡の穴

遺跡を巡つての景、昔に心通わせる作者。

グリーン賞「秋田の秋」

子と共に品種改良精霊馬

面白いなあと思った。精霊馬の品種改良は

茄子から何になるかな。感性の鋭さ。どんどん作句してもらいたい。

川柳

選評



山崎 如 酔

「あぎたの文芸」の選者として三期目を迎えた。この間応募数は、四十七句四十三句三十六句と減少の一途を辿っていることが残念でならない。投句数が少ないのは、これまでに投句していたベテラン勢が何らかの理由で止めたのではないかと思われた。そう思った理由は、入賞枠に入る句が少なかったからだ。従つて、今回は多数ある入賞候補句から入賞句を選ぶのではなく、どうやって入賞句にするのかという選び方であった。敢えて厳しい言い方をすれば、以前よりは低レベルの選だったので選評にも難儀した。入賞枠は五〇七句の指定であったが、選者で話し合い枠いっぱい七句を入賞句とした。結果的に自分が候補とした句は五句入賞した。

最優秀賞「迷界吉祥」

選者三名が一致した最優秀賞ではないが、合点の結果の最優秀賞である。上五と下五の対比がいい意味で目立つ句があり評価した。発想としては

「地雷原一飛びしたる黒揚羽」

の句が好きだ。ただ上五「地雷原」と下五

「黒揚羽」は、入れ替えしても同じ意味と捉えられることからもう一工夫欲しかった。

奨励賞「春を知る」

控え目な春も見えてくる。

「ふりかざすものがなくても生きられる」

この句の裏には、戦争を否定するものが潜んでいるのでなかるうか。最後の句、ここに秋

の「一房のぶどう」の句を持ってきたのは何

故だろうか。知りたい。

奨励賞「挽夏」

自分の周囲、身近な場面をよく観察していることが、列挙されている「出目金」「蟬」

「昼顔」「団扇」「西瓜」などから判る。ベテランの句だと思う。自分がトップに選んだ

句だ。

「いつまでも沖を見ている夏帽子」

で、過ぎ去る夏を惜しんでいる様子が解り、

この句で締めたのが良かった。

奨励賞「続編をつづる」

過去も少し織り交ぜ、前へ進む姿が見えてくる。

「新しい権でのり出す次の章」

で、続編という題と通ずる。これらの句を読んだときに、最初の章はどんなだろうという期待感を持たせた作りである。あつたとしたら是非読んでみたいものである。

入選「オノマトペ」

先ずは題の発想に感心した。更にオノマトペの対象となる下五が良かった。また「あきたの文芸」ではめずらしいユーモア句だったことも後押しした。但し、オノマトペという発想があつたからこそ入選だと思う。

入選「百歳と云う綾」

先ず百歳という年齢を詠んだということが入賞候補作品となった。最初は百歳の人が詠んだ句なのかなと思ったりもしたが

「百歳を生き永らえた母の意地」

とあるのでそうでもないらしい。

入選「言葉」

言葉が乱れてきている時代。愛にも凶器にもなる言葉。そんな時に、言葉を大事にしている人に会えたことがうれしい。

「ひと言が生きる支えになりました」

で、今生きているあなたの姿を想像した。ただ残念なことは、「言葉より握り返した手の温み」は独立した一句としてはよいかもしれないが、この七句の中では浮いている感じがした。

入賞句以外で、自分が候補にしたのは「天と地と」と「風に逢う」である。若い人がひとり投句を続けているようだ。昨年も言ったが是非吟社に入会し、川柳の基本というものを学んで貰いたい。

今回は、最後ということで手厳しい選評となったが許して欲しい。

私自身も勉強をさせて貰った三年間でした。ありがとうございます。



言葉のちから

伊藤 光 愁

第五八集は三十六篇二百五十二句の応募作品であったが、それぞれの作品に対する作者の熱い思いをしつかりと受け止めるべく精読

し、再読を重ねた。選にあたっては、句意が

しつかり表現されていること、そして発想、着想、表現力、句調、句の構成等をチェックポイントとした。また、前年の選評において、「あきたの文芸」は、題名を付けての七句連作であり、起承転結を意識して句を並べ全体を一篇の詩としての文芸性を持たせることが大切と記したが、その文芸性についても大きな評価ポイントとした。

最優秀賞「迷界吉祥」

・戦場にそれは見事な二重虹

・焼け跡で遊ぶ子供の鉄砲

・夕波がウインナ・ワルツを奏で居り

読み進めてまず、ウクライナ、ガザの痛ましい戦禍が浮かんだ。表題はあまり聞き慣れない言葉であるが、苦しみの中にも希望を見出す意と解釈した。その印象ある表題に倣って上句、下句を効果的に対比させるなど、その独自性にも注目した。また、六句目までの体言止めも句群の座りを良くしている。掲句「夕波のウインナ・ワルツ」に作者平和への願いが込められている。

奨励賞「春を知る」

・花を愛で人を愛して春を知る

・人というかたちで水になる水

人間としての自らの成長、心の変化を巧みなレトリックで詠み上げている。表題の「春を知る」は承の句からの引用であるが、その意は世の中、人の温みであろうか。掲句「人というかたちで」は句群の柱となっており、この一句からだけでも句意が伝わってくる。

奨励賞「挽夏」

・出目金と夏の暑さを分かち合う

・いつまでも沖を見ている夏帽子

日常の情景を鋭い川柳感で切り取り、過ぎゆく夏への思いを心象、具象巧みな表現で詠んでいる。掲句「出目金と」の擬人化はその着想がユニークである。また、終句の「夏帽子」は作者の思い出だろうか、心象風景が映しだされ余韻が残る。

奨励賞「続編をつづる」

・新しい権でのり出す次の章

・シナリオは三原色を掻き混ぜて

新たな章に漕ぎ出す作者の心情を、巧みな措辞で詠み込み、これまでの人生を踏まえての前向きな姿勢が伝わってくる。掲句の「三原色」は喜び、悲しみ、希望の意と読んだがレトリックの巧みに惹かれる。

入選「オノマトペ」

・ちゃらちゃらと安い男の独壇場

オノマトペを七句並べるという着想に注目した。いずれの句もひらがなでの擬声、擬態の表現としており、具体的イメージに効果を上げている。ただ、オノマトペに固執しているためか、句群に一体感がなく残念である。

入選「百歳と云う綾」

・百歳のカルテを生かし第二章

百歳という長い人生を生き抜き、この先も力強く生きるという母の偉大さ、誇らしさを起承転結に七句を並べ表題を詠み込んでいる。掲句「百歳のカルテ」には作者の措辞の巧みさを感じる。

入選「言葉」

・何気ない言葉が時に心打つ

言葉が人に与える計り知れない力というものを飾らない平明な表現で詠んでおり、その句意が明確に伝わってくる。日常に潜む何気ないことばの輝きを作者の川柳眼は見逃していない。

終わりに、川柳は作者の思いを短詩型の言葉に置き換えて読者の心に訴える文芸とも言われるが、その思いをどのような言葉へ、ど

う置き換えて読者に届けるか、改めて考えせられながらの選でもあった。

川柳銀の笛吟社同人

秋田市住



川柳を

楽しみながら

近藤 たつお

最優秀賞「迷界吉祥」

戦場にそれは見事な二重虹

荒廃と破壊の象徴である「戦場」に、自然の奇跡である「二重虹」がかかる。戦争の現実と自然の美しさとの対比が鮮烈です。

地雷原一飛びしたる黒揚羽

生と死、美と恐怖の対照が鋭い。「一飛びしたる」という自然な動詞の選択が、緊張の場に一瞬の生命の自由を感じさせます。

夕波がウインナ・ワルツを奏で居り

戦や死の影が消え、最後に訪れるのは調和と音楽。夕波とウインナ・ワルツという組み合わせが、自然のリズムと人間の文化を融合させています。

※戦争という重い主題に自然、季節、美の要素が見事に同居していて、一連の詩編のように読みました。「人間は絶望の中でも美を見出す」というテーマで貫かれているように思えます。

奨励賞「春を知る」

ふる里のあちらこちらに秘密基地

子ども時代の無限の想像力と自由があふれています。「あちらこちらに」という緩やかな言い回しが、懐かしい原風景を包み込むように柔らかない。誰の心にもある“帰る場所”を呼び覚まします。

ふりかざすものがなくても生きられる

力や権威、信条といった「振りかざすもの」を手放しても、人は生きてゆける……。そんな内的自由をうたいます。

※前半で「原風景」と「無垢の心」を描き、後半に「悟り」と「融解」、そして「調和」へと至る。「生きるとは、かたちを変えながら愛を知ること」……。そんな普遍的メッセージを柔らかに伝えてくれる作品群です。

奨励賞「晩夏」

出目金と夏の暑さを分かち合う

金魚鉢の出目金と、作者が同じ暑さを感じている情景。人と魚、室内と外界、暑さを通してつながる小さな連帯感が温かい。夏の孤独の中にも、静かな友情が感じられます。

いつまでも沖を見ている夏帽子

人の気配を残して置かれた夏帽子。誰かへの想い、去りゆく夏への惜別が漂います。まるで映画のラストシーンのような静謐さをたえています。

※連作として読むと「夏という時間」を生き抜く人間の姿が見えてきます。どの句も、感傷に沈まず、穏やかなユーモアと写実の力で支えられているのが見事です。

奨励賞「続編をつづる」

シナリオは三原色を掻き混ぜて

人生の設計図を、自らの手で描こうとする姿勢。三原色は希望・情熱・理性、あるいは過去・現在・未来を象徴するよう。「掻き混ぜて」という軽やかな動詞が、創造的な混沌を生きるエネルギーを感じさせます。

この角を曲がれば過去はもう喜劇

人生の転換点を軽やかに描いている。

「この角を曲がれば」過去の悲劇を笑える日が来る……。それは成熟の証。ユーモアと救いに満ちた句です。

※この七句は「人生の再出発」を描く詩的ドキュメントのように読めます。希望・挫折・再生という流れを、繊細な比喻と明快な語感で紡いだ、まさに人生の章立て、そのものです。

県内の川柳人口から思うに応募件数が少なすぎることに、何とも言えぬ淋しさを感じました。川柳愛好家として、責任を感じなければならぬのかもしれませんが、そして、各吟社の協力をお願いしたいと思います。

応募された方は沢山の句を作り、推敲を重ねながら七句に絞る作業をされたことと思います。自分の句の最初の読者は自分自身であり、七句に絞るのも自分自身です。応募までの学びは多岐に渡り深いものがあるように思います。是非多くの川柳愛好家の方々に来年度以降の応募をお奨めしたいと思います。

能代川柳社同人

エッセイ

三年目の選評

渡辺 修

最優秀賞の「お見送り、そしてお出迎え」は、一読して書き慣れた人の文章だと分かる。思わず微笑んでしまう表現も、肩の力が抜けているから滑らない。実にこなれた文章だ。

作者より十歳年上（八十七歳）の妻は元劇団員で、高齢だがすこぶる元気で活動的な人物だ。彼女はある朗読会の公演を大成功させ、新聞でも大きく取り上げられる。興奮冷めやらずに喜ぶ妻の姿を、同じ元役者の作者は暖かい目で見守る。車の送迎や食事の用意など、舞台の裏方のように支えているのだ。

一見すると明るい話に思えるが、同時に、この穏やかな日々がいつかは終わるという覚悟や、迫りくる老いの足音もさりと語られている。だからこそ、今が愛おしいのだ。

この重層的な構造が、作品を味わい深いも

のにしている。題名の「お見送り」と「お（出）迎え」に意図的なものを感じるのは、穿ち過ぎだろうか。

そして、最後の作者の言葉は、最高の愛の告白だということも、指摘しておきたい。

奨励賞の「糸」は、木都能代の盛衰と、旧料亭「金勇」を紹介する作品である。

端正で無駄のない文章が実に心地よく、限られた枚数の中で、能代の歴史や金勇の魅力が分かりやすくまとめられている。

ただし、ボランティアガイドの経験を踏まえた、金勇への思いを語る後半になると、まとまりに欠け、歯切れが悪くなる。題名の「糸」も適切だったかどうか疑問。書き出しと締めめの文章が、糸に縛られて窮屈そうだ。

もう一つの奨励賞「バスを買う」は、神奈川県川県の観光業者で不要になったバスを、作者の父が一万円で買ってきて、それを巡るさまざまな事件が語られる、楽しい作品だ。

県南の農村の爽やかな風景や、のどかな雰囲気がうまく描かれていて読後感がよい。

作者の友人の役割が中途半端なことや、説明が後出しになる箇所が気になる。書き出す前に、話の組み立て（構成）を十分に練って

いれば、もつとよくなったはずだ。

入選となった「愛猫の記」は、イヌ派を自認する作者が、偶然にも仔猫を飼うことになり、がらりと変わっていく生活や心情が、表現豊かに語られている作品。

文章力が高く、表現に工夫を凝らしていることがよく伝わってくる。ただし、その苦心も度が過ぎると裏目に出る場合がある。あえて平易な描写を選ぶ勇氣も必要だろう。

惜しくも選には入らなかったが、「あの日、デパートで」は個人的に高く評価している。また「成田家失格」、「私のカラス事情」の二作も、それぞれ光るものがあって印象に残った。是非次回も頑張ってほしい。

また、今回は魅力的な題材であるのに、作品としてまとめる技術が追いついていない、実にもつたない作品が目立った。

「セイタロノバカロー」、「土崎魚問屋」あつたこと、「曾祖父『三四郎』」、

「落語と私」がそれに当たる。特に「落語と私」は、いつそ小説にした方がよかったかもしれない。それくらい稀有な経験であり、エッセイ部門の字数で書けという方が無理というものだ。

グリーン賞の「ダイナミックお散歩」は、帰省していた大学の友人を盛岡まで迎えにいく話。友人との絆が「忍び駒」（お守り）に象徴され、彼女との新たな物語が、これからも紡がれていくのだろうと予感させる。

澁淵とした勢いのある文章で、技術的には未熟だが、読後感是不思議に悪くない。文章は書けば書くほど上手くなる。どうか書き続けてもらいたい。

私の担当は今年度で最後となるが、そこで最優秀賞を選出できたのは大きな喜びである。多くの作品応募者の方々、ともに議論を交わした選考委員の各先生、そして裏方として汗をかくてくれた県職員の皆さんに、心からの感謝を捧げたい。



寸感

菅原敏紀

『あきたの文芸』は六十年近い歲月、県民の創作意欲の高揚と文芸活動の普及・振興を

図ることを目的に文芸作品を公募し、優秀作品を掲載、刊行し続けてきました。今回、あきた県民文化芸術祭二〇二五「あきたの文芸」エッセイ部門で受賞された五名の方々には心から祝意を表します。

ところで、エッセイとはそもそも何でしょう。定義はいろいろありますが、端的に言えば、個人の体験や読書などから得た知見をもとに、感想や思索（思想）を綴った文章であり、その意味ではプロ、アマ問わず万人に開かれた文学ジャンルなのです。

もつとも、万人に開かれていることと、読者が作品を受け入れるかは別問題です。エッセイを読んだ方であれば、何を言いたいのかわからない、何かもう一つしつくりこない作品に出会った経験は一度ならずあると思います。では、内容を平易にすれば読者に受け入れられ、難解ならそっぽを向かれるかと言えば、物事はそう単純にはいきません。難解な内容であっても、読者に受け入れられるエッセイはたくさんあります。受け入れられるかどうかは、実際のところ作者がどれだけ他者の視点を意識しているにかかっているのです。

他者の視点（客観性）を欠いたエッセイはどうなるでしょう。誰一人共感できない個人の感想が延々と綴られた文章や、一体誰に向けて言っているのかわからない見解が羅列された文章……。それを持て余す読者の姿が容易に想像できます。

要は、書いていく中で読者に伝わらないのではと感じた時、表現を書き改めるなり、内容を書き加えるなりする気持ちを持てるかどうかなのです。これは何もエッセイに限った話ではなく、日常生活における会話やコミュニケーション・ション全般に通じると考えます。今回、応募作品全てを読み終えた時に感じたことはまさにこの点です。エッセイは何も特別なものではありません。日常のコミュニケーション同様、作者と読者との間には、血の通ったやり取りが必要なのです。

それでは受賞五作品について述べます。

「お見送り、そしてお出迎え」は、最優秀賞に相応しいテーマ、内容、構成でした。終わり方も湿り気がなく、何よりも読み終えた後、爽やかな心地よさが残りました。

奨励賞です。まず「糸」は木都と称された能代の変遷、金勇の誕生と現在を丁寧に綴つ

た作品。もう一つの「バスを買う」は、映像化されてもおかしくないような実に魅力的な題材を扱った作品。ただ二作品とも奨励賞以上とするには、題材の処理の仕方や構成などの欠点がありました。

入選の「愛猫の記」は、題材、文章もいいのですが、わかる人にはわかるといった表現が散見された点が惜しまれます。趣味嗜好を共にする専門文芸誌であれば一席でもいいと思うのですが……。

グリーン賞の『ダイナミックお散歩』は、身近事象にまつわるエッセイとしては、今回の応募作品の中でよく書けている方ですが、説明が不親切なのと題名の安直さが気になりました。ただ、一読して若い方の作品とわかり、瑞々しく、物怖じしない感性はグリーン賞に値すると感じました。

初めての選考

畠山 研

初めて選考委員を務めることになりました。応募くださった皆さんやこれから応募を

検討している方々に少しでも参考になれば幸いです。以下、入賞作として選ばれた作品にコメントし、また終わりでは入賞を逃した作品についても触れています。

「お見送り、そしてお出迎え」

高齢夫婦の日常が軽やかな筆致で明るく前向きに描かれており、読後感がよかったです。タイトルから暗い内容かと思われましたが（「見送り」は「死」を想起させるので）、読むと希望や活力に満ちていました。はじめは「スマホ」、「ライン」、そして「やれやれ」という言葉、飲もうとしているお酒が「ハイボール」であること、そして「ハートマークのスタンプ」と、意図的に洒落た雰囲気を出しているのかとも感じられましたが、けれどもそこに現れる「七十七歳の亭主」は気取りとおよそ無縁の人物、非常に好感が持てました。老いから目をそらすわけでもなく、けれども無意識的な若々しさも垣間見えるという、不思議な魅力に満ちたエッセイでした。

「糸」

かつて街に根づいていた木の文化、その歴史や関連する建物等、とても読みやすく書かれていました。押しつけがましい語り口はありません。おそらく多くの読者が十分知らないであろう情報が淡々と書かれています、疲れを覚えず読むことができます。それはこのエッセイが優れているからでしょう。落着いた筆致が評価されたと思います。

「バスを買う」

タイトルのとおり、バスを買うとどうなるのかという興味関心をくすぐる内容で、タイトルに負けず最後までおもしろく読むことができました。セリフが複数あり、時折それらを誰が発しているのかがわかりづらかったところもありましたが、そうした細部の不十分な点を補うほどの内容が評価されました。

「愛猫の記」

飼猫のことを書くのなんとありふれたことかと思われるかもしれませんが、文章力の高さ、巧みな構成によって力作に仕上がっていました。何気ない日常に緊張感のある展開を織り込み、読み手を惹きつけて離さない

ところ、玄人の筆致が光っており、個人的には一番評価したエッセイでした。にくいとまで感じられるその技巧はやや目立ちすぎるという印象も残すかもしれませんが、本作に注がれた熱意と手間は明らかであり、ほかの作品より一歩抜きん出ていました。

「ダイナミックお散歩」

読んでいて、まるで自分自身も秋田をはじめとする東北の地を旅する（あるいは「お散歩」する）ような感覚を覚えました。気の合う友がいることが羨ましく感じられるエッセイでした。「インスタントカメラ」等の小道具も粋です。「友だち」にこの入賞をどう報告するか、どんな方法でこの友をまた驚かせるだろうか、想像も膨らみました。

以下、入賞を逃したエッセイについても書かせていただきます。選考中、最も多く飛び交った言葉は「惜しい」と「もったいない」でした。タイトルは素晴らしいが、内容がそれに追いついていない（あるいはその逆の）もの、出だしや結びの工夫があとわずか足りないもの、一つのエッセイ中に話題が複数あ

り絞り込めば化けたであろうもの。読んでいてどれも忘れられないエッセイばかりでした。ぜひ書き直した上でまたご応募いただきたいです。応募にあたって気をつけるべきことは過去の選評でも十分指摘されているようでしたのでここでは控えるとし、また次のエッセイを拝読させていただくことを楽しみにしています。

あきた県民文化芸術祭2025「あきたの文芸」応募状況

1 部門別（以下、数値は応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
R7年度	11	33	46	68	36	23	217
R6年度	10	25	58	69	43	20	225
R5年度	11	28	56	77	47	22	241
R4年度	9	32	61	77	39	24	242
R3年度	14	38	55	78	45	25	255

2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳		エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
R7年度	7	4	17	16	19	27	42	26	21	15	15	8	121	96
R6年度	6	4	13	12	27	31	41	28	26	17	8	12	121	104
R5年度	7	4	9	19	22	34	44	33	27	20	6	16	115	126
R4年度	7	2	13	19	24	37	39	38	25	14	12	12	120	122
R3年度	9	5	13	25	20	35	44	34	31	14	13	12	130	125

3 年代別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	100代	不明	総数
R7年度	24	9	5	4	9	27	57	65	17	0	0	217
R6年度	18	7	3	7	11	29	75	63	11	1	0	225
R5年度	20	9	1	10	9	38	81	65	8	0	0	241
R4年度	18	4	2	8	13	44	85	63	5	0	0	242
R3年度	11	6	3	10	21	51	77	68	7	0	1	255

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
小説・評論	4	1	2	0	1	1	0	1	1
詩	12	3	0	0	1	7	6	3	1
短歌	3	2	2	0	2	4	9	20	4
俳句	4	1	1	4	1	6	23	19	9
川柳	1	0	0	0	1	4	12	16	2
エッセイ	0	2	0	0	3	5	7	6	0

4 新旧割合

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	4	20	32	49	32	18	155
新	7	13	14	19	4	5	62
計	11	33	46	68	36	23	217

再…以前にも応募したことがある方の作品数

新…今回初めて応募した方の作品数

5 月別応募数

6月	7月	8月	計
17	26	174	217

あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第五十七集（令和六年度）応募二百二十五作品

・小説・評論部門 最優秀賞 坂本 愛子 「二〇五〇年 東北州 由利支庁」

奨励賞 森田 真 「チチ活」

・詩部門 奨励賞 鈴木 仁 「君の歌」

奨励賞 鈴木 敏男 「キチジョウソウ」

・短歌部門 最優秀賞 熊谷 すが子 「デジタル世界」

奨励賞 佐々木 鏡子 「なにわ梅」

奨励賞 東海林 文子 「盆帰り」

奨励賞 玉尾 サツ子 「亡夫のワイシャツ」

・俳句部門 最優秀賞 片倉 弓 「窓から」

奨励賞 佐々木 成 「羽黒山」

奨励賞 三浦 静佳 「古稀のほとり」

奨励賞 岸部 吟遊 「玄武」

・川柳部門 最優秀賞 藤子 あられ 「あれから」

奨励賞 小畑 犀川 「刹那を生きる」

奨励賞 三浦 千両 「羽化の序章」

奨励賞 三浦 善隆 「母」

・エッセイ部門 最優秀賞 高橋 文子 「蛍光管にアボ」

奨励賞 白井 道和 「母のおはぎ」

編集後記

◎あきた県民文化芸術祭2025「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸第五十八集』を刊行しました。

この作品集は、十五歳から九十四歳にわたる応募者からの作品二百十七編より、最優秀賞五編、奨励賞十四編、入選十九編、二十五歳以下の文芸活動を応援するグリーン賞五編、計四十三編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2025の一環として実施しております。応募いただいた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をしてくださった各市町村、報道機関、図書館などの文化施設、さらには、事前審査から選考・校正まで多大なる御協力をいただいた選考委員の皆様深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今後もより読みやすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、一層充実させていきたいと思っております。

あきたの文芸第五十八集

あきた県民文化芸術祭2025

「あきたの文芸」入賞作品集

令和七年十一月十四日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話〇一八―八六〇―一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

印刷・製本 株式会社大潟印刷

